筑波大学新聞

第380号
編集責任
筑波大学新聞
編集委員会
TEL・FAX 029(853)6699
E-mail
shinbun@un.tsukuba.ac.jp
月　刊

発行所
筑波大学
茨城県つくば市
天王台1－1－1

雙峰祭４年ぶりに通常開催

３日間で約３万人が来場

第49回筑波大学学園祭（雙峰祭）が11月3～5日に開催された。4年ぶりの通常開催となった今年のテーマは「開花」。雙峰祭をきっかけに全ての人が新しいことに挑戦し、新たな花を咲かせてほしいという思いが込められた。ステージパフォーマンスや模擬店など昨年の倍以上となる約240企画が行われ、昨年の約7000人を大幅に上回る約3万人の来場者が訪れた。（川上真生＝社会学類2年、2、5面に関連記事、4面に記者の声、6、7面に特集、12面に関連写真）

昨年はオンラインと対面の併用方式で開かれたが、新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけが5類に移行したことを受け、完全対面で実施された。

また、屋外での物品販売や食事の提供も4年ぶりに解禁され、体芸エリアから第三エリアまでの各エリアには模擬店が軒を連ねた。前夜祭が明けた4日は夏日になるなど天候にも恵まれ、食べ歩きを楽しむ来場者の中には、半袖姿も見られた。

模擬店が立ち並び来場者でにぎわうペデストリアンデッキ（11月4日、松美池前で）＝川上真生撮影

第三エリアにはマジックショーや鉄道模型を展示する企画が集まり、親子連れが楽しむ姿も見られた。

昨年は人数制限されたステージ企画も出入り自由となり、来場者は各サークルによる音楽ライブやパフォーマンスを楽しんだ。

雙峰祭を締めくくる5日の後夜祭では、石の広場の「UNITED STAGE」でお笑いライブと雙峰祭グランプリ、TSUKUBA COLLECTION（つくコレ）が開かれた。また、虹の広場から花火が打ち上げられ、会場は大きく盛り上がった。

雙峰祭グランプリでは、来場者の投票で選ばれた企画がステージ企画部門、一般企画部門に分けて表彰された。両部門とも最優秀賞にはアイドルコピーダンスグループ「Bombs！」が輝いた。また、「アカペラサークルDoo－Wop」も両部門で優秀賞を受賞した。この他、ステージ部門ではYOSAKOIソーランサークル「斬桐舞」のスペシャルステージ、一般部門では全学学類・専門学群・総合学域群代表者会議（全代会）有志による喫茶店「珈琲・俺」が優秀賞に選ばれた。

つくコレではミス部門グランプリに大川妃菜さん（知識1年）、ミスター部門に岡本瞬さん（情科3年）が選ばれた。2人は留学あっせんサービス「スマ留」を運営する「リアブロード」（本社・東京都渋谷区）から贈られるスマ留賞も同時受賞し、1週間の留学機会が与えられた。特別賞にはミスター部門にエントリーしていた増村裕さん（障害3年）が選ばれた。

つくコレでグランプリを受賞した大川さん（右）と岡本さん（11月5日、石の広場で）＝加藤緑撮影

永田学長再任　通算14年在任へ

人格・実行力を評価　選考会議

永田恭介学長

学長選考・監察会議（議長・河田悌一元関西大学長）は10月24日、永田恭介学長の再任を決定した。任期は来年4月1日から2027年3月31日までの3年間。文部科学相が任命する。永田学長は13年4月から学長を務めている。今回の再任で、在任期間は開学以来最長の14年間になる。

筑波大の学長選考要項では、現学長に再任の意思があり、再任される場合の任期が新たな中期計画期間にまたがらない場合、同会議が再任を審査すると定めている。

永田学長の再任期間は第4期中期計画期間（22年4月～28年3月）に収まり、本人が再任の意思を示したため、新たな学長選考はなされなかった。

学外と学内各10人で構成する同会議は今年5月と9月に再任審査の具体的な手順の確認と検討を行った。その後、永田学長から提出された業績調書、所信表明書などに基づき、10月24日に永田学長と面談した。

面談では永田学長によるプレゼンテーションと質疑応答が行われた。

同会議はその後の審議で永田学長の再任を決めた。「人格が高潔で、学識に優れ、大学における教育研究活動を適切かつ効果的に運営する能力を有していること、情熱と実行力を有し、ビジョンを明示しながら中期計画を策定・推進し、本学の卓越性を高める者である」としている。

永田恭介（ながた・きょうすけ）氏　1953年生まれ。76年東京大薬学部卒。同大薬学系研究科博士課程修了。薬学博士。東京工業大助教授などを経て2001年筑波大教授。13年4月から筑波大学長。19年6月から国立大学協会会長。専門は分子生物学、ウイルス学。（結城希＝国際総合学類1年）

注目記事

校友会　開学50周年記念シンポ　2
芸術祭　芸術を身近に感じて　5
女子バレー　インカレ優勝　8
高校生が地元の活性化策提案　10
きき酒選手権　筑波大初優勝　11

特　集

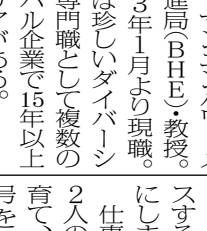
第49回雙峰祭　6・7
笑顔「開花」した３日間

ミニ特集

知られざる芸術の世界
筑波大の屋外アート　3

梅ちゃん先生の What is ダイバーシティ？

障害とは何か



梅田恵　教授

ヒューマンエンパワーメント推進局（BHE）・教授。2023年1月より現職。日本では珍しいダイバーシティの専門職として複数のグローバル企業で15年以上のキャリアがある。

私には人生の師匠と仰ぐ先輩がいます。先輩はプールでの事故が原因で、14歳の時に両目の視力を失いました。まず直面した壁は、1人で自由に動けなくなったこと、そして好きな本が読めなくなったことです。

苦労して点字を習得しましたが、点訳本はオリジナルの何十倍もの分量になります。辞書は一つの単語の説明だけでも数十行、時には数ページにわたり、大好きな英語を学ぶのも大変でした。

その後、日本IBMに研究職として入社し、1990年代にウェブページ上の文章を読み上げる世界初のソフトウエアを開発。世界中の視覚障害者や文字を読めない人たちがインターネット上の情報へアクセスすることを可能にしました。

写真：毎日新聞社提供

2014年のソチパラリンピックの閉会式では「IMPOSSIBLE（不可能な）」に「'」を加えて「I'M POSSIBLE（私はできる）」に変える演出がなされた。

仕事をしながら2人のお子さんを育て、40代で博士号を取得。現在は、視覚障害者の自由な行動を支援する人工知能（AI）の開発に、仲間と一緒に取り組んでいます。

先輩の名前は浅川智恵子さん。現役では世界で約100人しかいないIBMフェローの一人であり、昨年、日本科学未来館の館長に就任しました。

浅川さんを通じて「障害とは何か」を考えさせられます。おしゃれでユーモアのセンスが抜群。目が見えない代わりに、聴力や記憶力が人より発達し、洞察力やリスクマネジメント能力も高い浅川さん。しかし障害があると、「健常者と同じ仕事をさせるのは可哀そう」という偏見にぶつかることが多々あります。浅川さんも例外ではありません。

「私にもし二つの選択肢が与えられたら、絶対に難しい方を選ぶ。なぜなら障害者に選択肢が与えられることは滅多にないから」と浅川さんは言います。

障害者の行動を抑制するのは、障害者そのものよりも、偏見や無関心といった社会や人々の心の障壁ではないかと思います。

偏見や差別は知識不足や恐れから生じます。人は、差別的な言動を自分が直接していなければ差別にならないと考えますが、差別の黙認は差別に加担するのと同じことです。

12月3日は国際障害者デーでした。障害者の権利と福祉を促進し、障害者が抱える課題に対する意識を向上させることを目的としています。皆さんも、何かできることはないか考えてみてください。

筑波おろし

「そのサツマイモ、私が収穫したんです」。雙峰祭の模擬店で大学芋を販売し、何度もそう言いそうになった。紙コップ1杯分200円。多くの人から「おいしかった」と声をかけられた▼雙峰祭の約2週間前、農業サークルの活動で、茨城県内の農場に出かけた。サツマイモの収穫を手伝う代わりに、一部を頂けることになった▼縦に長い畑をトラクターが掘り起こしていく。その後について、半分ほど顔を出したサツマイモを拾い集める。思ったより腰に負担がかかった。次に待っていたのが選別作業だ。大きくて形も整ったA品、大きさは十分なものの、形がいびつだったり傷があったりするB品、小さすぎて売り物にならないC品の三つに分ける。こちらは地道で時間がかかる。計5時間の作業後には、疲れ果てていた。半日の作業でこれなのだから、農家の人々の苦労は計り知れない▼高品質の食材を不足なく調達し、清潔な環境で調理、提供するには多大な労力がかかる。収穫から調理、販売にまで関わり、食べるものに困らない生活のありがたみを実感した▼収穫の時、猛暑のせいで今年は農作物が不作だという話を聞いた。地球温暖化が及ぼす影響を身近に感じる。環境問題に簡単な解決法はない。新技術の開発ばかりを頼りにせず、個人でも廃棄やエネルギー消費の削減に取り組む必要がある。そう思い、廃棄予定のC品のサツマイモをもらって帰った。ふかし芋にするとおいしかった。

校友会主催

開学50周年記念シンポ

卒業生ら思い出語り合う

筑波大学校友会（会長・江崎玲於奈元筑波大学長）は10月29日、東京キャンパスで「開学50周年記念シンポジウム」を開いた。ノーベル物理学賞受賞者の梶田隆章・東京大卓越教授が大学の現状や未来について基調講演し、卒業生6人が在学中の思い出などを語り合った。オンラインでもライブ配信され、国内外から学生や卒業生、教職員約170人が参加した。

（加藤緑＝生物学類2年）

大学の役割について語る東京大の梶田卓越教授（10月29日、東京キャンパスで）＝川上真生撮影

元筑波大学長でノーベル物理学賞受賞者の江崎会長がビデオで開会あいさつ。白川英樹名誉教授がノーベル化学賞を受賞するなど、筑波大関係者が開学以来、各界でさまざまな成果を上げてきたことを紹介した。更に、自身の物理学賞受賞は筑波大開学と同じ1973年だとし、「どちらも50周年で、私にとって記念すべき年になった」と結んだ。

続けて永田恭介学長が来賓代表としてビデオメッセージを寄せた。「学生や教職員の力だけでなく、支えてくれたステークホルダーのおかげで50周年を迎えられた」と話した。

梶田教授の基調講演のタイトルは「学術と大学の役割とは何だろうか―私の研究を振り返りながら―」。冒頭では自身の研究分野である「ニュートリノ」と「重力波」を紹介した。

梶田教授は今年9月まで日本学術会議会長を務めていた。講演の後半では、大学が担うべき役割が増加していることや日本の研究力に話が及んだ。

日本発の論文数が他国に抜かれていることや、大学教員が研究に割ける時間が減っていることなどを示し、「日本の研究と高等教育は危機的状況にある。改革が必要だ」と訴えた。

続いて、各界で活躍している卒業生5人が学生生活の思い出などを語り合うシンポジウムが開かれた。山口香教授（体育系）がモデレーターを務めた。

「陸の孤島だったからこそ、自分たちで工夫して何かをする『手作り文化』があった」「外国人教員の授業では、芝生で英語のディスカッションをする時もあり、話についていくため予習した」などの話が出た。全員が「筑波大に入学して良かった」と口をそえた。

筑波大時代の思い出を語り合う卒業生ら（10月29日、東京キャンパスで）＝衣笠有紀撮影

筑波大の今後に対する期待も語り合われ、「学生や教職員には、型破りな人になってほしい」「筑波大をもう一度、注目を集めた開学間もないころのような特別な大学に」などの意見が出た。

筑波大学校友会は2017年、卒業生や在学生、教職員のネットワーク作りや交流の活性化を目的に発足した。事務局長の池田潤副学長（国際担当）は「コロナ禍が落ち着きつつあり、就職活動支援など学生のためのイベントを積極的に開いていきたい」と話した。

公衆衛生学会で「第九」合唱

ポストコロナで連帯

ベートーベンの交響曲第九番「合唱付き」の特別演奏会が11月1日、つくば国際会議場（つくば市竹園）で開かれた。同会議場で開催中だった「第82回日本公衆衛生学会総会」の記念演奏会で、学会関係者と一般市民計84人が合唱した。同学会には延べ約3500人が参加し、会場を埋めた聴衆が合唱団とプロオーケストラが奏でる力強いハーモニーに聞きほれた。

演奏会のテーマは「音楽の力でポストコロナを切り拓く！」。同学会長の田宮菜奈子教授（医学医療系）が企画した。東京ロイヤルフィルハーモニー管弦楽団と声楽のソリスト4人を迎え、第3楽章・第4楽章が演奏された。

合唱団は全国各地の公衆衛生学会員らとつくば市など地元住民が半数ずつを占めた。女性は赤、男性は青のスカーフ姿で会議場エントランスの大階段に並び、「フロイデ（歓喜よ）！」と高らかに歌い上げた。

田宮教授は「次なるパンデミック（感染症の世界的な大流行）に立ち向かうため、人類の連帯を呼びかけた『第九』を医療・公衆衛生関係者、市民が一緒に歌うことで連帯を強めたかった」と企画の意図を語る。

田宮教授は今年2月、「住民とともに公衆衛生学会で第九を歌う会」を立ち上げた。今年5月には、プロオーケストラとソリスト、指揮者を招く費用を賄うためにクラウドファンディングを実施。6月までに408万円（目標金額370万円）を集めた。成立後、合唱参加者の募集を始め、8月から東京とつくば市、土浦市の3会場で合唱練習をスタート。本番の指揮者を務めた二期会会員の佐藤宏之さんらが指導にあたった。各地の学会員が練習に参加できるようオンラインも併用した。また、特別演奏会の当日は一般市民100人を招待した。

学会関係者と市民が一緒に「第九」を合唱した＝田宮教授提供

田宮教授は筑波大医学専門学群の学生時代に土浦市民合唱団に所属し、同学群の有志と第九を歌った経験があった。当時、一緒に合唱した白井千香・全国保健所長会副会長と、医療やスポーツ、健康に関する研究などに取り組むGMSSヒューマンラボ社（東京都目黒区）の安藤裕一代表取締役が実行委員として参画。磯博康・同学会理事長や斎藤環教授（医学医療系）など全国から駆けつけた卒業生も合唱団に加わった。

田宮教授は「コロナ禍で大変苦労した公衆衛生関係者や市民への感謝とこれからへの思いを込めて歌った。学生時代の仲間を含め多くの人のお陰で無事開催できて感無量だ」と笑顔を見せた。

（高元愛香＝心理学類3年）

研究者や養蜂家ら集い議論

ミツバチサミット　約1200人が参加

研究者や養蜂家、学生らがミツバチなどに関する研究成果や活動を紹介する「ミツバチサミット2023」が11月18～20日につくば国際会議場（つくば市竹園）で開かれた。同サミット実行委員会（委員長＝横井智之・筑波大生環系助教）の主催で、専門家らによるシンポジウムやミツバチを飼育している高校・大学生による「全国学生養蜂サミット2023」など10を超えるプログラムが行われ、3日間で延べ約1200人が来場した。

（結城希、写真も）

同サミットは2017年に第1回が開催された。ミツバチやハナバチなど植物の受粉を助ける送粉者が生態系において果たしている役割や、蜂蜜など生産物を通して人間の食や健康に貢献していることについての理解を深めることが目的だ。

隔年開催だが、21年はコロナ禍で中止された。22年のプレイベントを経て、今年は19年以来の通常開催となった。

専門家らによるシンポジウムでは、ミツバチと人間との関わりの歴史や養蜂生産物の認知症予防効果など、幅広い分野の話題が提供された。また、高校生や若手研究者らによるポスター発表も行われ、来場者は興味深そうに聞き入っていた。

ポスターの横で笑顔を見せる横井智之助教（11月20日、つくば国際会議場で）

3日間の期間中は、会場に「はちみつマルシェ」コーナーが設けられ、世界各地で作られた蜂蜜やミツバチ関連の雑貨、蜂蜜酒の「ミード」などが販売された。

ミードは人類最古の醸造酒と呼ばれ、蜂蜜に水と酵母菌を加えて作る。マルシェでミードを販売していた「日本ミード協会」は20日にセミナーを開き、ミードの歴史などを紹介した。セミナーの後半では試飲会があり、12種類のミードが参加者に振る舞われた。

実行委員長の横井助教は「研究者だけでなく養蜂家や学生、企業など幅広い人たちが集うことで、新たな出会い、試みが生まれる。ミツバチらと私たち人間が共に生活する環境を守るため、今後も継続的に開催していきたい」と話した。

筑波大の20年後の学修考える

教学デザイン室と全代会が共催

筑波大の20年後の学修について考えるイベント「転生したら、学籍番号2043××××だった件」が11月5日、1D棟で開かれた。筑波大学園祭（雙峰祭）の学術企画として、教学デザイン室チュートリアル教育タスクフォースと全学学類・専門学群・総合学域群代表者会議（全代会）が共催した。筑波大生と教職員、卒業生約30人が参加した。

参加者の意見が書かれた付箋紙を張り出す全代会メンバー（左）と土井助教（11月5日、1D棟で）＝青野心平撮影

筑波大は2020年10月、世界の有力大学と肩を並べる大学として、文部科学相から指定国立大学の指定を受けた。その際に掲げた構想の柱の一つがチュートリアル教育の導入だ。学生1人当たりに1人のチューター教員を配置し、学生の学修（学問を学び、修めること）をサポートする。今回はその在り方を探ろうと企画された。

前半は学生3人と卒業生1人が登壇し、現在の学生生活や20年後に望む学修のイメージを語り合った。

昨年度の全代会議長を務めた河野美羽さん（人文3年）は「目的意識がなく、何となく大学に入学した学生が多い。アルバイトやサークルでもいいので、大学生活に真剣に向き合う学生が増えてほしい」と語った。

イベントでは、ウェブサイトを通じて寄せられた参加者の意見がリアルタイムで会場に表示された。「学生の取り組み全てに単位が与えられたらいい」などのコメントがあった。

卒業生の五十嵐大悟さん（平成25年度人文学類卒）は、雙峰祭で開かれた男女不問のビューティーコンテストに女装参加し、グランプリを受賞した経験を紹介。「筑波大には変わったことをしていても放置してくれる雰囲気がある。『陸の孤島』や『森の中』といった環境は維持されてほしい」と話すと、会場から拍手が上がった。

後半は、参加者が20年後の筑波大に望む姿を付箋紙に書き出してもらい、それを会場に掲示した。「自分のやりたいことが邪魔されない大学」「自分の興味に応えてくれる大学」などの意見が出された。

ファシリテーターを務めた土井裕人助教（人社系）は「学修の主体である学生が意見を出せる場を、今後も作っていきたい」と語った。

（高元愛香）

知られざる芸術の世界　大学が美術館！？

筑波大の屋外アート

東西約1キロ、南北約4キロ。緑豊かで広大な筑波キャンパスは、実は屋外美術館でもある。ブロンズ像や石像、鉄と陶器を組み合わせたオブジェなど約30の屋外アート作品があり、教室移動の合間にも気軽に楽しめる。では、それらはなぜ、そこにあるのだろうか。芸術系の教員らに取材し、設置の経緯や作品に込められた思い、楽しみ方を探った。読者の皆さんも、取材を基に作成した作品マップを片手に、「アート散歩」してみてはいかが。（川上真生＝社会学類、山本貴世、結城希＝国際総合学類、衣笠有紀＝心理学類、青野心平＝第2類）

芸術作品が空間潤す

筑波大は50年前の開学当初から、芸術作品を積極的にキャンパスに設置してきた。2021年に策定された「キャンパスマスタープラン」でも芸術作品の設置によって「潤いのある豊かなキャンパス環境を目指す」とされている。

筑波大を南北に縦断するペデストリアンデッキを歩くと、数多くの屋外アート作品が目に入る。ほとんどが筑波大やその前身校の関係者が制作したか、筑波大にゆかりのある人物がモチーフの作品だ。

開学から4年後の1977年、まず三つのブロンズ像が設置された。芸術専門学群の故書間弘教授（当時）の「大気」、故小池藤雄教授（同）の「秋想」、伊藤鈞（ひとし）助教授（同）の「子供の四季」だ。「大気」は松美池の向かいに、「秋想」は中央体育館に隣接する広場に、「子供の四季」は筑波大附属病院の正面玄関付近に設置されている。

本紙第19号の記事には、「芸術専門学群各教官」が「筑波大にふさわしい作品」たちとされていた。

「芸術専門学群をもつ総合大学は日本では筑波大学しかない。（中略）この筑波大学の特徴を、もっと発展させていくべきだと思う。その広場にふさわしい、想像力に富んだ抽象的な作品も、どんどん増やしていきたい」と語ったと伝えている。

本紙のお勧め5作品

アート作品の設置箇所はペデストリアンデッキ沿いから奥まった場所までさまざま。本紙の独断でこのうち5点の概要や作品に込められた思い、鑑賞のポイントを紹介する。

新入生とツーショット「嘉納治五郎先生之像」

大学会館前に立つ堂々とした袴姿のブロンズ像。近代柔道の創始者で、東京高等師範学校の校長も務めた嘉納治五郎氏だ。

同氏の生誕150周年を記念した「筑波大学嘉納治五郎生誕150周年記念事業」の一環として2010年に設置された。入学式などでは、新入生とその家族らが一緒に写真を撮ろうと、順番待ちの列ができる。

彫刻家で文化勲章受賞者の故朝倉文夫氏が制作したもので、講道館（東京都文京区）と東京キャンパス（同）に設置されていたものと同じ型が用いられた。「日本の体育の父」とも呼ばれた偉人が筑波大生を静かに見守っている。

貫禄の「嘉納治五郎先生之像」（12月2日、大学会館前で）＝衣笠有紀撮影

学生の待ち合わせスポット「Miserere XⅦ 1999」

中央図書館のほうを向き、空に向かって両手を広げているブロンズ像。休み時間には周りで食事を取ったり、談笑したりする筑波大生の姿が見られる。

miserere（ミゼレーレ）は「哀れむ」を意味するラテン語。東京高等師範学校出身の彫刻家、中村晋也氏（97）が同名のシリーズの一つとして1999年に制作した。中村氏が2007年に文化勲章を受賞したことを記念し、08年に筑波大に寄贈された。

像は約3メートルの台座に乗っていて、人々は像を見上げる形になる。中村氏の作品を集めた中村晋也美術館（鹿児島市）の学芸員、野間口泉氏は「像が広げた両手の先にある大空と像とが一体となり、見る人を希望に導くという思いが込められた作品だ」と語った。

快晴を仰ぐ「Miserere XⅦ 1999」（12月2日、石の広場で）＝衣笠有紀撮影

5C棟に放つ存在感「archetype50024」

円環状に集まった鉄の塊に白が基調の不定形な陶板が巻き付く。高さ約3メートル、幅約2・7メートル。5C棟前で異様な存在感を放っている。齋藤敏寿（としひさ）准教授（芸術系）の作品だ。

2005年に開催された水戸芸術館現代美術ギャラリー（水戸市）の企画展用に制作され、「昇華」と同時期の08年に設置された。

「archetype」はユング心理学において、人類の根本に備わっている「元型」のことを指す。齋藤准教授は「見る人によって解釈は自由。時間があれば角度を変えて鑑賞したり、材質による質感の違いを確かめたりしてほしい」と話す。

複雑なパーツが絡む「archetype50024」（12月2日、5C棟で）＝青野心平撮影

宮坂慎司助教に聞く「触れて楽しんでほしい」

毎日目にしていても、じっくり鑑賞する機会は少ない屋外アート作品。鑑賞のポイントや管理上の課題を彫刻が専門の宮坂慎司助教（芸術系）に聞いた。（聞き手・山本貴世、衣笠有紀）

「アート作品」というと、なんだか近寄り難く、「触れてはいけないもの」と思っている人が多いだろう。大切に扱ってほしいのはもちろんだが、もう一歩近づいてみてほしい。1000年単位で残るブロンズをはじめ、屋外の作品の多くは耐久性の高い素材であり、人が優しく触れる分には問題ない。思い思いの距離感で作品に近付き、遠くからでは気が付くことのできなかった表面のでこぼこや、素材の感じを味わってほしい。

親しみやすい屋外作品だが、一方で、虫が巣を作ったり鳥のフンが付着したり、雨の影響で作品に筋のような跡が表れたりすることもある。そのため、メンテナンスは大切で、ブロンズ像作品であれば、希釈した中性洗剤での洗浄や、必要に応じて蜜蝋（みつろう）などでのコーティングをすることで、より美観が保たれる。

ただ、キャンパスの屋外作品は数が多く、設置範囲も広い。だからこそ、鑑賞中に気になる汚れを見つけたら、拭ってみるなど、できる範囲で作品に接する形で、日常的なメンテナンスが行われるのが望ましい。それが作品に対する愛着にもつながるだろう。屋外アート作品は大学のアートリソースであり、将来的には、学内外の人がメンテナンスに参加しながら、作品に触れられるイベントを実施したいと考えている。

学内の主な屋外アート作品MAP

（取材を基に作成）

松美池の番人「大気」

筋骨隆々。松美池の向かいにたたずみ左手を掲げ、右手は真っすぐどこかを指さしている。クリスマスなどのイベント時にはコスプレをさせられるなど、筑波大生に親しまれているブロンズ像だ。1964年の第7回日展の彫刻部門で、文部大臣賞を受賞した。

勇ましくたたずむ「大気」（12月2日、松美池前で）＝青野心平撮影

作者の故書間教授（当時）は設置された当初「健康な青年男子の姿をかり、心身の充実、高い理想、積極的な行動への意欲を表現してみたいと願った作品」というコメントを本紙に寄せている。彼は一体どこを指さしているのか。鑑賞のついでに考えてみてはどうか。

木のぬくもり感じる「昇華」

5C棟前のペデストリアンデッキ沿いに設置されている木彫りの彫刻が「昇華」だ。等身大より少し大きめで、横になった体勢の人間が4本の柱で支えられている。

2006～08年に実施された5C棟の耐震改修工事に合わせて設置された。制作した大原央聡教授（芸術系）は「つくばの地で学生時代を過ごす方々のエネルギーが、より高みへと昇華していくことに思いを込めた」と話す。

立ち上がろうとしている姿勢はその表れだ。手足以外は抽象化され、のっぺりとした体は性差をなくし、男でも女でもない「人間」をつくるという意図がある。

材料のチーク材は耐久性が高いことから、屋外で展示するのに向いている。

大原教授は「鑑賞する時は、自分が感じたことを大事にしてほしい。触っても問題ないが、美術作品なので優しく扱ってもらえると助かる。この作品をきっかけに、アートの世界に興味を持ってもらえれば何よりだ」と語った。

つややかな質感の「昇華」（12月2日、5C棟で）＝青野心平撮影

学生生活の中にあるアート作品

筑波大生は屋外アート作品をどう思っているのか。思い出や印象を石の広場などで聞いた。

【3類1年・男性】

入学式の日に嘉納治五郎像と写真を撮るために長い列ができていた。夜中になぜかテンションが上がり、大学会館前の小さい像（自問3―12）とハイタッチしたことがある。

【知識2年・男性】

友人と夜間に散歩をしていた時、松美池のほとりにある「森と生きる」の像と目が合った。闇夜にうつろな目が浮かび上がり、恐怖を感じて逃げ帰った。

【社学1年・女性】

新入生歓迎イベントで学内探検をした時、大気像や石の広場の像（Miserere XⅦ 1999）を回った。皆で像のポーズを真似して写真を撮ったことが思い出深い。

【人文2年・女性】

石の広場にある像は待ち合わせに便利だ。名前を知らないので「石の広場の像の横にいるよ」などと言って場所を伝える。入学前に筑波大の見学をした時に見て何だろうと思っていた。名前やここに置かれている理由は知らないままだ。

記者の声

嵩元愛香

学生文化
雙峰祭4年ぶり完全復活
伝統は形を変えて続くもの

【1面参照】今年の雙峰祭は4年ぶりに通常化され、入場規制がなくなった。お昼時には焼き鳥やお好み焼きなどの模擬店に長蛇の列ができた。石の広場のステージにも多くの観客が集まり、学生団体のパフォーマンスが始まると、音楽や声援がキャンパスに響き渡った。

その光景を見て、4年前の雙峰祭がよみがえった。私は4年前、生物学類に入学し、1年後に心理学類に再入学した。このため、コロナ禍前の雙峰祭を体験している。当時は、学園祭実行委員として学内を巡るスタンプラリー企画に携わった。スタンプを押しに来た来場者の笑顔を見て、自分は筑波大生なのだという自覚が湧いたものだ。

今年は学生生活を巡り、雙峰祭以外にも、新入生歓迎祭でのビラ配りなどコロナ禍前に戻ったイベントが多い。4月の新入生宿舎入居もその一つだ。

4年前の4月、私はグローバルヴィレッジに入居した。指定された時間にグローバルヴィレッジに到着し、辺りを見渡すと、あちらこちらに赤や黄色の法被を着た学生集団がいた。何が起きているのか分からず、恐る恐る敷地に足を踏み入れた。受付を済ませると、「生物学類」と書かれた旗を持ち、緑の法被を着た集団が現れ、「入居おめでとう!」と私を取り囲んだ。

入居をサポートしに来た2年生たちだった。「出身地は?」「何のサークルに入りたいの?」と矢継ぎ早に質問しながら、部屋まで案内してくれた。勢いに面食らったが、歓迎の思いが伝わり、温かい気持ちになった。

しかし、今年の入居日の光景は4年前とは違った。法被を着た2年生は棒立ちで、新入生が前を通り過ぎても、積極的な声掛けはあまりなかったように思う。「毎年こうやって新入生を迎えている」と、4年前の先輩たちは話していたのだが。

大学は多くの学生が4年で入れ替わり、企業などと比べて世代交代のスパンが短い。そこにコロナ禍による空白期間が追い打ちをかけた。私たち学生が言う「伝統」とは何かを、改めて考えさせられた一件だった。

だが、以前の宿舎入居対応が完璧だったわけではない。新入生は置いてきぼりで、2年生だけで盛り上がっていた感もあった。今後、年を経るにつれ、新入生の心情に寄り添ったサービスが生まれ、それが新たな伝統として続くかもしれない。

本紙編集部も今年から、週に1回の編集会議を原則対面に戻した。コロナ禍でオンライン開催が中心になっていたが、それでは編集部員の表情や雰囲気が読みにくく、会話も発展しない。対面復活後は、部員同士が親しみやすい場になるよう心掛けたが、以前の編集会議とは異なるものになっていただろう。

雙峰祭と同様に筑波大学新聞も来年で50周年を迎える。

私にとって筑波大学新聞はやりたいことを後押ししてくれる場だった。形はどう変化しても、筑波大関係者の思いを伝え、広く大学と社会との交流の場となるという根幹が残ってくれればいい。同じことを継続するのが伝統ではなく、時代に合わせて残ったものが、新しい伝統になるのだ。（筑波大学新聞編集長・心理学類3年）

筑波時評

死を語る
お互いの苦痛を理解すること
「生」を考えることに他ならない

秋山肇　助教（平和研究・憲法学）

人文社会系・助教・国際基督教大大学院アーツ・サイエンス研究科修了。博士（学術）。立命館大国際関係学部嘱託講師などを経て、20年より現職。

日本財団が昨年実施した調査によれば、18～29歳の若年層のうち、44・8％が希死念慮を持った経験があるという。安楽死について扱った本紙第379号（2023年11月1日発行）の「記者の声」には、記者の友人が「将来のことを考えると死にたくなる」と話していたことが書かれている。私たちは「命」や「生」、「死」とどのように向き合えばいいのだろうか。

希死念慮を持つ場合も安楽死を望む場合も、日常生活において耐え難い苦痛があることが多い。例えば、同財団の調査では、性被害を受けた人の76・4％が希死念慮を持った経験があると回答した。一方、性被害を受けていない人の場合、希死念慮を持った経験があるとの回答は39・3％だった。これは性被害を受けた人が希死念慮を持ちやすいことを示している。

安楽死を望む場合も、病気などにより耐え難い苦痛がある。そのため、この耐え難い苦痛をどのように取り除くことができるのか、ということが重要な論点になる。性被害など社会問題の対策と、病気などの苦痛を除去するための科学技術の発達が加えて、戦争、貧困問題や環境問題などのさまざまな問題の現状を、SNS（ネット交流サービス）などを通して目の当たりにし、それらに対応していかなければならない時代に生きているのである。苦痛や「死」と向き合うことも同様に求められている。

「重い」問題について語り合うときに大切なのは、さまざまな考えがあることを前提として、一旦どのような考えも尊重することであろう。どのような考え方も、その人の生活の中で悩みながら考えたことである。相手を尊重することで、本音で語り合うことができるであろう。

場合によってカウンセラーなどの専門家と話すことが望ましいこともあるが、日ごろから苦痛や「死」について語り合うことは、お互いの苦痛を理解することにもつながるのではないか。そして苦痛や「死」を語ることは、「生」や「善き生」を語ることでもある。多様な苦痛や「死」を語り、聞く経験を通して、自らの苦痛や「死」、「生」に関する考え方を見直すこともできるだろう。その先に苦痛を除去するための方法を考え、議論し、実現できるのではないか。

「死」について語ることは、苦痛と向き合いながら「生」について考えることに他ならないのである。

反射鏡

2023年のマイブーム

2023年もあとわずか。筑波大生はこの1年をどう過ごしたのだろうか。中央図書館前などで、今年の「推し」や「マイブーム（自分の中での流行）」について聞いた。（川上真生＝社会学類2年、山本貴世＝国際総合学類1年、青野心平＝第2類1年）

【応理3年・男性】

女性アイドルグループ「FRUITS ZIPPER」が好きになった。所属している部活動の試合会場でこのグループの楽曲が流れ、気になって調べたことがきっかけ。両親や友人にも勧め、出演しているテレビ番組などを見ている。

【応理3年・男性】

漫画を読んだことがきっかけで「葬送のフリーレン」という作品に夢中になった。魔法使いである主人公がほのぼのとした旅をする様子が描かれている。9月末にアニメ放送が始まり、周りに知っている人が増えた。今は友人と一緒にアニメ鑑賞を楽しんでいる。

【3類1年・男性】

筑波大主催のホームゲーム「TSUKUBA LIVE!」でハンドボールの試合を見たことをきっかけに、さまざまな部活の試合を見にいくようになった。同年代の選手がプレーをする様子を見て応援するのが楽しい。友人を誘って試合を見に行くことが流行だ。

【社工2年・男性】

「映える」写真ではなく、日常のリアルを切り取った写真を投稿するSNS（ネット交流サービス）アプリ「Be Real」が身近で流行している。毎日異なる時間に通知が来る。2分以内に写真を投稿すれば友人の写真もリアルタイムで見ることができる。友人のありのままの姿を知ることができ、インスタグラムの投稿よりもハードルが低い。

イラスト＝衣笠有紀（心理学類3年）

【応理2年・男性】

今年はやったのは「ツイッター」から名称変更した「X」だと思う。ツイッター社のシンボル「青い鳥」の看板が競売に掛けられたことを知った時は寂しさを感じた。最初は違和感しかなかったが、今では当たり前のように使っている。

【1類1年・女性】

必修科目「学問への誘い」にある「誘い」という表現を日常会話で使用することが、自分の中でプチ流行している。つい最近ではデータサイエンスの授業時に「折れ線グラフを一緒に作ろう」と友達から声を掛けられた際、「折れ線グラフに誘われているね」と笑いながら答えた。学生間で共通認識が取れることが流行の要因として大きいと思う。

物価高　どこで感じる？

物価高が止まらない。今年10月の全国消費者物価指数は前年同月比2・9％増の106・4で、26カ月連続で上がった。品目別では「生鮮食品を除く食料」が7・6％増と、上昇が目立った。11月末には物価高対策を盛り込んだ政府の今年度大型補正予算（一般会計歳出約13兆円）が成立した。物価高を感じる場面や生活の工夫を、石の広場などで筑波大生に聞いた。（結城希＝国際総合学類1年、大吉ひなた＝人文学学位プログラム1年）

【日日3年・男性】

野菜など食料品の値上がりに加えて、趣味としてよく行く映画の料金が100円上がった。物価高では、金銭的ダメージもあるが、買うのをためらったり、出費の大きさに焦ったりと精神的ダメージの方が大きい。買い物の時は同じ種類の商品を比較して一番安いものを選んでいる。

【国際1年・男性】

売られている商品の内容量が減っている。例えばスティックパンの長さが短くなったり、パッケージに入った棒菓子の本数が減っていたりする。外食の値上がりも実感している。メニューの中で安い商品を探し、クーポンを以前より活用するようになった。学生宿舎に住んでいるが、洗濯機の利用料金が1回100円から200円に上がったのは財布に痛い。使う回数を減らし、できるだけまとめて洗っている。

【人文4年・女性】

物価が上昇しているのは主に食品だと思うが、あまり気にしていない。今年は就職活動や卒業論文執筆で忙しく、友人と遊びに行くなど娯楽に割く時間がない。食費以外の出費がほとんどなくなり、節約する必要を感じていない。

【教育P前期1年・男性】

至る所で物価上昇を実感している。中でも食料品の値上がりが一番痛い。自炊の回数を週4回に増やし、できるだけ安く作れるレシピを調べて節約している。アルバイトと仕送りで生計を立てている。賃金はわずかに上昇したが、仕送りの金額は変わらず、生活は少し苦しくなっている。

【社工4年・女性】

食料品が値上がりしていると感じる。スーパーでは、割引シールが張られた安い品物を選ぶようにしている。それでも出費がかさみ、気持ちが窮屈になる。最低賃金の上昇でアルバイトの時給も上がったが、物価の上げ幅には追い付かず、生活は楽になっていない。

【応理3年・男性】

特に卵や牛乳の値上がりが大きいと感じる。1割ほど上がったのではないか。「すき家」や「松のや」などの外食チェーン店も上がっている。食品系の値上がりは生活に響くが、生活の工夫はしていない。

【国際1年・男性】

コンビニエンスストアのおにぎりが高くなった。以前はよく買っていたが、最近はパンを代わりに買っている。実家から通っているため、食品の値上がりを実感する場面は少ない。

芸術祭 ２年生主体で対面開催
「ゲームのように気軽に楽しんで」

芸術専門学群の学生らが作品の展示や販売、ワークショップなどを行う「筑波大学芸術祭」が11月4、5日に開催された。筑波大学学園祭（雙峰祭）の主要企画の一つで、4年ぶりに完全対面での実施となった。今年のメインテーマは「GAME」。「芸術をゲームのように気軽に楽しんでほしい」という意味を込めた。6A棟、6B棟、総合交流会館を会場に、芸術祭実行委員会公式企画六つと芸術専門学群生から募集した14の有志企画の計20企画を子供から大人まで幅広い年代の人々が楽しんだ。

（衣笠有紀＝心理学類3年、青野心平＝第2類1年）

作品に入り込んで鑑賞

6A棟2階で作品を展示した「GATE展」では、芸術専門学群の学生ら43人が制作した油絵や彫塑など62作品が並んだ。

責任者の中村碧琉さん（芸専2年）は「芸術に親しむ入り口にしてもらいたいという思いから、展示名を決めた。芸術の自由さを表現するため、階段の壁などでも作品を展示し、大きさを制限しない展示も募集した」と語る。

研究生の中村音巴さんを中心に4人が共作した「Halo iland」は、展示空間を含めて作品とするインスタレーションの手法で制作された。

中村さんらの作品「Halo iland」の中に入って楽しむ来場者（11月4日、6A棟で）＝青野心平撮影

作品のメインは架空の島「ハロ」のジオラマ（約3㍍四方）で、それを囲む二面の壁のうち一面を、島で取れるという設定の宝石で飾った。来場者は水が滴る様子を表した透明なビーズの幕をくぐり、空間に入り込んで観賞した。

また、「ハロ」を舞台にした物語も絵巻物形式で展示され、来場者はジオラマと絵巻物の双方から、架空の島やそこで起こる出来事を楽しむことができた。

中村さんは「島の模型や物語を通して、誰もが行きたくなるような世界を表現したかった。架空の世界だが、どこかにあるのではないかと鑑賞者に思わせる表現方法を、これからも模索していきたい」と語った。

身近な素材で芸術楽しむ

同委員会公式企画「芸術祭くらしとあそぶ。」は6A307教室を会場に、身近な材料を使って学生の制作活動を体験したり、日々の暮らしの延長で芸術を楽しめたりするアトラクションが企画された。

このうち4日に開かれたワークショップ「あま～いキッチンリトグラフ」では、チョコレートやアルミホイル、炭酸飲料などを使って版画を制作し、子供たちに大人気だった。

リトグラフは、水と油の反発作用を利用した版画法だ。ワークショップではまず、油分を含んだチョコレートでアルミホイルに下絵を描いた。次にアルミホイルを炭酸飲料に浸した。すると、チョコレートでコーティングされていない部分と炭酸が反応し、油分を弾きやすくなる。その状態で版面にインクを塗ると、下絵部分だけが油分を含んだインクを吸着する。版面に白い紙を載せ、インクを写し取れば、作品の完成だ。

この他、ペットボトルのキャップでストラップを作るワークショップなども開かれた。1、2年生7人で構成するアトラクション企画班の責任者を務めた久保田実々さん（芸専2年）は「芸術専門学群の学生が感じている制作の楽しさを多くの人に知ってもらえたと思う」と手応えを語った。

中世ヨーロッパの衣装を着た藤川さん（11月4日、6B棟で）＝青野心平撮影

羊皮紙で中世欧州を体験

6B203教室が会場となった「羊皮紙屋さん」では、中世ヨーロッパで用いられていた羊皮紙作りや、羽根ペンで羊皮紙に文字を書いたり絵を描いたりする体験型ワークショップに延べ約80人が参加した。

また、羊皮紙の歴史や作り方を紹介する展示も合わせて行われた。

羊皮紙は、羊や牛の皮を引き伸ばして薄く削り、乾燥させた紙状の材料。ワークショップでは、参加者が木枠に皮を張って引き伸ばす作業を体験。乾かす前の皮を触って、ぷるぷるした質感を楽しんでいた。

主催した藤川朋伽さん（芸専4年）は「展示も含め予想以上に多くの人が来てくれた。芸術祭では絵画や彫塑、デザイン領域の企画が目立ったが、羊皮紙を通じ、美術史領域の魅力も伝えられた」と企画の成功を喜んだ。

「芸術専門学群生のリアル届けられた」

完全対面、かつコロナ禍前と同じく2年生が中心となって開催された今年の芸術祭。オンライン開催となった一昨年、対面・オンライン同時開催だった昨年は、対面開催の頃のノウハウを知る3、4年生が中心となり進めてきたが、今年から従来の形に戻った。

芸術祭実行委員長を務めた原仁瑞さん（芸専2年）は「上級生と比べ、2年生は習っていないこと、できないことも多い。従来のように楽しんでもらえるか不安だった」と振り返る。

だが、1、2年生計約60人で作る同実行委は来場者が芸術に親しめることを目標に準備を進めてきた。

「学生が普段から制作の場として使っている教室で展示や企画を実施し、来場者にリアルな作品制作を体験してもらった。敷居が高いと思われがちな芸術を、身近に感じていただけたと思う」と原さんは話した。

MC展 力作そろう
作風異なる39点

河原井さんの作品「徐に」（11月20日、つくば美術館で）

「第39回MC展」が11月14～19日、茨城県つくば美術館（つくば市吾妻）で開かれた。芸術学学位プログラム博士前期課程の学生21人が洋画24点、日本画12点、版画3点の計39点を出展し、延べ741人が会場を訪れた。

展示場に入ってまず目に入るのは日本画を専攻する河原井かれんさん（芸術P前期2年）の作品「徐に」だ。

縦・横ともに194㌢の大作で、雲肌麻紙上に水干絵具と岩絵具、盛上材を使ってキリンを立体的に描いた。河原井さんは「体の大きな生き物の包容力を表現したかった」と説明する。

期間中には鑑賞者と制作者が作品について意見交換する「ギャラリートーク」が日本画領域、洋画及び版画領域で1回ずつ開かれた。コロナ禍で昨年は筑波大の学生と教員限定だったが、今年は一般も含め約50人が参加。出品者が語る制作の意図に、来場者が聞き入った。

来場した東京都足立区在住の20代男性は「多くの作品が集まり、作風がそれぞれ異なるので飽きずに楽しめた」と話した。

同展の運営を担った学生代表の千種風香さん（芸術P前期1年）は「1985年から開催されている歴史ある展覧会で、責任を感じていた。来場者から、学生の作品を見ると励みになるという意見などをいただき、うれしかった」と充実感に満ちた表情を見せた。

（金慧欣＝知識情報・図書館学類1年、写真も、12面に関連写真）

私の一本

『プラダを着た悪魔』 デヴィッド・フランケル監督

英語を教えているので「どうすれば英語力が伸びますか？」と聞かれることが多い。ニーズにもよるので一言で答えるのは難しいが、洋画鑑賞はお勧めだ。英語字幕を使ったり、字幕なしで聞き取ってみたり、段階を踏んで楽しく英語力を向上させることができる。

私が一番回数を重ねて見た映画は、デヴィッド・フランケル監督の『プラダを着た悪魔』（2006年公開）だ。

主人公はジャーナリストになることを夢見てニューヨークにやってきたアンディ・サックス。有名なファッション雑誌の編集長のアシスタントを務めることになるが、アンディはオハイオ州出身のあか抜けない女性で、ファッションに興味はない。最初は次のステップへ進むための仕事と割り切っていたが、精力的に仕事に取り組むようになり、徐々に編集長に認められていく。しかし編集長は昼夜問わず無理難題を言うので、仕事が順調になるにつれて、恋人や友人との関係がギクシャクしてしまう。

私はこの映画をかれこれ20回は見ている。最初は純粋に内容を楽しむために見て、自分自身の英語力を向上させるために数回見て、英語の授業で取り上げるために10回以上見た。映画で使われている表現は自然な英語だ。好きなセリフは自分でも使ってみたいと思うので、何度も復唱する。そしてこの復唱によって一文丸ごと口をついて出てくるようになる。またアメリカではイディオムが多く使われるので、この映画に出てくるイディオムは私が担当している英語の授業でもよく紹介している。

しかし毎回「英語の勉強のために」と気合を入れているわけではない。ニューヨークの街並みやきらびやかなファッション、気分が高揚するような音楽などにも引き込まれるので、純粋な気分転換としてもお勧めしたい。この映画の魅力の一つは、アメリカの風景やビジネス文化も一緒に楽しめることだ。この映画を見るとアメリカに留学したくなる人が増えるだろうし、アメリカへ旅行に行き、映画に出てきたホテルやレストランを見つけるのも楽しいだろう。

ちなみに私はアンディの出身地と設定されていたオハイオ州に4年ほど住んでいた。確かにのどかなオハイオと世界一にぎやかなニューヨークは雰囲気が随分違う。しかしオハイオにも「スミス・アンド・ウォレンスキー」というレストランがあり、見つけた時は「あの映画に出てきたステーキハウスだ！」とうれしくなった。

人生には大きな選択をしなければならない時がある。仕事とプライベートの兼ね合いは？ 理不尽なことでも将来のためならば我慢する？ あなたがアンディだったらどうする？ アンディを数年後の自分と重ね合わせるであろう大学生に考えてもらいたい。そして自分の意見を英語で発表してみよう！

土方裕子 准教授（外国語教育）

人社系・准教授。筑波大大学院人文社会科学研究科博士課程修了。博士（言語学）。米オハイオ州立大教育学部ESLプログラム講師、筑波大人社系助教などを経て2023年より現職。

ぶらり俳句 筑波大

「秘密」

・大根を抱へ噂は軽かつた
・寒暁に秘密を暴かれてしまへ
・まつすぐに朝の高さにゐて嘘

12月4日、つくば市上境で

つくばの冬の朝は、寒い。冬に晴れることの多い太平洋側では、夜の間に地上の熱が逃げてしまい、朝は冷え込む。よく晴れた空に、身に染みる寒さ。これがつくばの冬の朝だ。しかし、そんな中でも人々は動いている。庭先に出る人、店の仕度を始める人、学校に行く人、犬の散歩をする人……。体の芯から冷えるような静かな朝にも、人々の暮らしがある。そういう等身大の人々の生き様を、俳句に詠みたいと思う今日この頃だ。

（島崎寛永＝人文学類4年、写真も）

来場者の笑顔が「開花」した3日間に迫る

コロナ禍からの復活遂げた雙峰祭

4年ぶりに通常開催となった第49回筑波大学学園祭（雙峰祭）。コロナ禍前に匹敵する約3万人が筑波キャンパスに来場し、教室展示や模擬店、ステージ企画などを楽しんだ。だが、運営の担い手となった学生たちの多くは通常開催の経験がなく、手探りで準備を進めてきた。学園祭実行委員会（学実委）や課外活動団体のメンバーらに取材し、来場者の笑顔が「開花」した3日間に迫った。（横山心咲＝比較文化学類、加川上真生＝社会学類、結城希＝国際総合学類、衣笠有紀、高元愛香＝心理学類、藤緑＝生物学類、新田早紀＝生物資源学類、金慧欣＝知識情報・図書館学類、青野心平＝第二類、大吉ひなた＝人文学学位プログラム）

4年ぶりに屋外飲食解禁

今年の雙峰祭では4年ぶりに模擬店の屋外出店が解禁され、キャンパスのにぎわい演出に貢献した。昨年の雙峰祭では飲食企画は認められたものの、新型コロナの感染対策のため販売は屋内に限り、食べ歩きは禁止されていた。

だが、今年はペデストリアンデッキ沿いなどに焼き鳥や焼きそば、クレープなど計93店の模擬店が並び、購入を呼びかける学生たちの声がこだました。昼時には注文待ちの長い行列ができる模擬店もあった。

食べ歩きを楽しんだという社会学類4年の女子学生は「人と何かを食べ、明るい雰囲気の中で歩く行為は、非日常的な魅力がある」と話していた。また、人文学学位プログラム修士課程2年の男子学生は「人がいてこその祭り、ひいては大学であると再確認した」と、模擬店復活を喜んだ。

広島県人会

その中でも人気を集めていたのが、広島県人会が体芸エリアに出店した広島風お好み焼きの模擬店だ。2日間で約1000食を売り上げ、予定枚数の600食を大幅に上回った。

同県人会は1975年の発足で、筑波大で最も歴史ある県人会の一つだ。現在は約50人が所属する。

宿舎祭（やどかり祭）や雙峰祭での出店は県人会にとって一大イベントだったが、コロナ禍で販売できない状況が続いていた。

世良優月会長（芸専3年）は「今年は復活1年目と位置づけ、OBに調理から販売までの流れを教えてもらった」と言う。

広島風お好み焼きは、小麦粉の生地をクレープ状に焼き、その上にキャベツなどの具材を重ねて焼く。麺が具材に含まれているのも特徴だ。小麦粉と具材を混ぜて焼く「関西風」とは異なる。

本場の大きさは25センチほどだが、雙峰祭では10～15センチの屋台用サイズで提供し、食べやすくした。

こだわったのは広島の味を再現すること。お好み焼きソースなどを販売するオタフクソース（本社・広島市西区）の学園祭応援プロジェクトに応募し、お好み焼き用の粉やソースなどの提供を受けた。鉄板やヘラなども同社から借り、メンバーの一部は同社の東京支店で焼き方のコツを実技指導してもらった。

世良会長は「メンバーの多くが未経験で、手探りの部分も多かったが、先輩の助けを借りて乗り切ることができた。広島風お好み焼きを多くの人に認知してもらえたことが何よりもうれしい」と語った。

お好み焼きを焼き上げる県人会員（11月5日、6A棟前で）＝青野心平撮影

広島風お好み焼きが大人気

「つくばイチ受けたい授業」

筑波大の教員が自身の研究を来場者に分かりやすく伝える学実委公式企画「つくばイチ受けたい授業」も、4年ぶりに復活した。

学実委で同授業の企画長を務めた小島菜月さん（工シス2年）は「大学の学園祭は中高生の来場も多く、ためになる場を提供できたらいいと思い復活を決めた。先生方も、『このような場に参加する機会が得られて光栄だ』などと積極的に引き受けてくれた」と振り返る。

授業は11月4、5日の2日間、3A棟で行われた。睡眠研究の世界的権威の柳沢正史・国際統合睡眠医科学研究機構長や恐竜研究者の田中康平助教（生環系）ら計6人の教員が11コマの授業を担当し、延べ約500人が聴講した。

柳沢教授は「幅広い年代の来場者がいて、睡眠に関する質問も多く寄せられた。やりがいのある講義だった」と話した。田中助教は「来場者に小学生が多くて驚いた。その中から、筑波大生や研究者が生まれてくれたらうれしい」と語った。

小島さんは「総合大学である筑波大ならではの先生方を分野が分散するように選んだ」という。

4日午前にトップバッターで登場したのは、身体機能を改善・補助・拡張・再生する世界初の装着型サイボーグ「HAL」を開発した山海嘉之教授（シス情系）。

総合大学の面白さ紹介

山海教授はHAL誕生の土台となったAIロボット・情報系の融合新領域「サイバニクス」について紹介。詰め掛けた中高生らには、あるべき未来の姿を描き、現在を見つめ直す「バックキャスティング」の重要性を説き、「やるべきことが明確になる。壁に直面しても異分野視点のアプローチをすることで突破も可能だ」とエールを送った。

5日午後1時からは、吉原ゆかり教授（人社系）が「ポップ・カルチャーとシェイクスピア」と題して講義した。シェイクスピア作品のストーリーやセリフは日本の漫画やアニメにも取り入れられていることを説明。アニメ「黒執事」の死神と悪魔の戦闘シーンで、死神がシェイクスピアの代表作品「ロミオとジュリエット」の台詞「あなたはどうしてロミオなの」をアレンジして語る場面があることを紹介した。

聴講した高校3年生の女性は「漫画やアニメも研究対象になると知った。筑波大でサブカルチャーについて研究したい」と話した。

小島さんは「過去の資料がほとんどなく、先が見えない不安を感じながら1年間準備を進めてきた。無事に終わってよかった」とホッとした表情を見せた。

サイバニクスについて講義する山海教授（11月4日、3A棟で）＝川上真生撮影

来場者が増えたことで、展示企画も大きな盛り上がりを見せた。

ジオネットアース

地球科学サークルのジオネットアースは化石や鉱物の展示や体験型イベントなどを1B棟で行い、延べ約1000人が来場した。

同団体は約80人のメンバーが化石、鉱物、環境、気象、地形・地質の5分野に分かれて活動している。

化石分野と鉱物分野は日本各地で発掘、採集された資料を展示した。石から植物や昆虫の化石を掘り出す発掘体験イベントも好評だった。

環境分野は地震による液状化現象の再現模型を展示。容器に砂と水を入れて水分の多い土地を再現し、建物に見立てた発泡スチロールをその上に立てた。模型を揺らすと液状化で発泡スチロールが沈み込む。

気象分野は気象庁が日本各地に設置する地域気象観測システム（アメダス）や特徴的な気候の地域を巡った記録を展示した。地形・地質分野は筑波山など三つの山体模型を展示した。

代表の福永拓真さん（地球3年）は「今年から本格的に活動を再開したが、学園祭経験者がおらず、試行錯誤の連続だった。来場者に地球科学の奥深さが伝わったらうれしい」と語った。

日本各地で採集された化石を見る来場者たち（11月5日、1B棟で）＝新田早紀撮影

地球のロマン発掘

つくバーチャル

つくバーチャルはVR（仮想現実）コンテンツの製作を通じてVR技術を学ぶサークル。メンバーが製作したVRゲームを体験できる「つくバーチャルVR展」を2B棟で開き、延べ約400人が来場した。

来場者は▽ミニゲーム集の「メイド・イン・つくバーチャル」▽音楽のリズムに合わせて遊ぶ「VRhythm！」▽現れたキャラクターを連続パンチで倒す「もぐら叩き」――の三つから遊ぶゲームを選択し、頭にVRゴーグル、手にVRコントローラーを装着してゲームを体験した。

このうちメイド・イン・つくバーチャルは15のミニゲームからなり、製作に約5カ月かけた力作だ。あるゲームではゴーグル越しの画面に風船がずらりと並び、「割れ」と指示が表れる。参加者はコントローラーを振って画面上の剣を動かし、風船を割っていく。

代表の大川和弘さん（知機P2年）は「ミニゲーム内の指示は極力シンプルにし、VRゲーム初心者でも直感的に操作できるようにした」と話す。

ゴーグルをかけた参加者は机などの周囲の障害物が見えないため、障害物にぶつかりそうになったら画面に警告を出すなど、参加者の安全にも配慮したという。

名古屋市から来た女子高校生は「VRの距離感覚が実世界と変わらず不思議だった」と話した。

つくバーチャルの所属メンバーは8人。週1回のミーティングでVRコンテンツの製作などを行っている。

大川さんは「今後は雙峰祭だけでなく大学でイベントを実施し、VRの魅力を広めていきたい」と語った。

オリジナルゲームで観客魅了

VRゲームを楽しむ人々（11月4日、2B棟で）＝嵩元愛香撮影

ぬいぐるみ病院

医学群生で作る「つくばぬいぐるみ病院」は2B棟で医師の仕事体験企画を4年ぶりに実施した。主に小学生以下の子供が対象で、延べ約400人が訪れた。

テーマはインフルエンザ。毎年この時期から流行し始めるインフルエンザへの理解を深めてもらうとともに、検査や注射への恐怖心を軽減する狙いがある。今回は、メンバーのうち約20人が参加した。

参加者はまず「診察」「検査」「注射」のいずれか一つのブースを選び、白衣を着て医師役となる。

「診察」ブースでは、メンバーが患者に見立てた縫いぐるみを手に待ち受ける。参加者は「今日はどうされましたか」「まわりにインフルエンザの人はいますか」など、印刷された診察の手順に従って問診し、最終的に診断を下す。

「検査」ブースではサルなど動物のお面の鼻に綿棒を入れて検体を採取し、模擬検査キットでインフルエンザかどうかを判定した。

一番人気は「注射」ブース。実物の注射器を使い、肌に見立てたスポンジに模擬注射をした。牛久市在住の4歳男児は「注射器に触るのは初めてで楽しかった」と喜んだ。

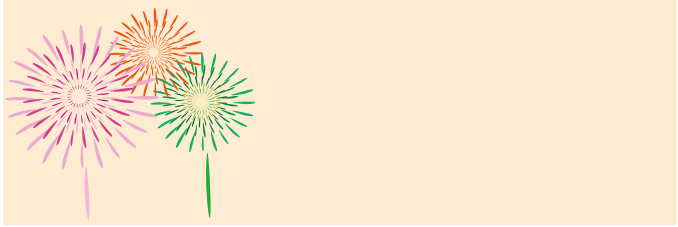
検査キットなどの小道具は全てメンバーの手作り。4年前の参加メンバーから当時の様子について聞き、約2カ月前から準備した。

全てのブースに参加するため2日間続けて来場した人や、4年前の参加者もいたという。

企画責任者の越智向日葵さん（看護3年）は「子供たちから『帰ったらお医者さんごっこやる！』などと言ってもらい、医療を身近に感じてくれたことが実感できた。この体験が、自身の健康を守る行動につながってほしい」と語った。

縫いぐるみ相手に問診する参加者（11月5日、2B棟で）＝加藤緑撮影

医師になりきって治療



学実委委員長に聞く

後手に回らぬ準備徹底

雙峰祭の準備から当日の運営までを支えたのが学園祭実行委員会（学実委）のメンバーたちだ。委員長の鈴木暁満（きょうま）さん（工シス2年）に開催までの苦労などを聞いた。（聞き手・嵩元愛香）

後夜祭であいさつをする学園祭実行委員長の鈴木さん（11月5日、石の広場で）＝加藤緑撮影

1月に行われた学生生活課との最初の会議から、制限なしの開催を想定し、準備を行ってきた。

制限撤廃に伴い、今年は屋外企画が4年ぶりに復活した。過去資料を読み込み、屋外企画の運営に関するマニュアルを作り直した。

後手に回らない準備を徹底するためだ。同じ調理企画でも屋内と屋外では対応が異なるし、屋外は4年ぶりの実施となったので、衛生管理の観点から、従来より対応を厳しくした。

開催を迎えるまで不安だったが、大きなトラブルなく順調に進められた。屋外のにぎわいや来場者が楽しむ姿を見られて感無量だ。

雙峰祭は筑波大生に非日常感を提供し、挑戦する場になっていると感じた。「つくばイチ受けたい授業」など学術関連の企画も多く、研究機関としての筑波大の魅力も発信できた。

メンバーには「自分たちが雙峰祭を作るんだ」と呼び掛けてきた。雙峰祭は来年でいよいよ50周年。後輩たちも思い思いの雙峰祭を作り上げてほしい。

有識者の声

土井隆義教授

若者の社会や文化に詳しく、「友だち地獄」や「『宿命』を生きる若者たち」などの著書がある筑波大OBの社会学者、土井隆義教授（人社系）に、雙峰祭の意義や学生への期待について聞いた。（聞き手・結城希、衣笠有紀）

雙峰祭は筑波大生にとって、日常の枠を超えて互いに交流できる場という意義を持つ。「ハレとケ」という言葉がある。ケの状態（日々の繰り返し）では関わる相手が限定され、筑波大生同士がつながっている感覚は薄れてしまう。そのためハレの日として雙峰祭などのイベントを行い、時空間を共有することで、大学という共同体の一員だという実感が得られる。

サークルや学類などでもイベントはあるが、筑波大全体としての一体感を持てるイベントは、雙峰祭以外にはなかなかないだろう。

筑波大生の実感を持つ機会

過去の雙峰祭では、大学と学生の対立もあった。1978年は歴史家、家永三郎氏らを呼んだ講演会が大学当局に禁止され、80年は企画内容を巡って大学側と学生側が対立し、中止になった。当時2年生だった私も、開催方針をめぐって連日夜明けまで議論した。

最近の雙峰祭は模擬店が中心となり、政治や社会問題といった硬派な企画は少なくなったと感じる。またサークルなど所属団体の活動の延長として参加するようになり、祭り全体を味わうことが少なくなっているようだ。過去には後夜祭に集まった学生みんなでダンスをして盛り上がったこともあったが、今はない。

これからの雙峰祭には、それぞれの活動が島宇宙化した大学内で、島同士を橋渡しする企画や工夫が求められるのではないか。

来場者の声

■コロナ禍前と遜色ない【看護P前期1年・女性】

学群1年生の時にコロナ禍前の雙峰祭を経験していたが、当時と遜色ないくらい盛り上がっていた。後夜祭では4年ぶりに「お笑いライブ」を見て、大勢の人と笑いを共有しながら楽しむことができた。

■笑顔をたくさん見られた【生物2年・男性】

出店のにぎわいやステージの盛り上がりを楽しんだ。去年はマスクで見えなかった笑顔をたくさん見ることができ、開放感を感じた。

■迫力あったステージ企画【数学4年・男性】

友人がステージ企画でダンスをするのを見た。ダンスには迫力があり、自分も踊りたくなった。後夜祭の花火を見て、授業も行事もオンラインが中心だった4年間を思い返した。

■サークル知ってもらえた【社学2年・女性】

K－popコピーダンスサークル「コグマ」の舞台責任者として参加した。雙峰祭グランプリで特別賞を受賞することができ、半年以上を費やした準備が報われた。所属するサークルを多くの人に知ってもらえ、うれしい。普段は関わる機会がない他の団体の活動も知ることができた。

後夜祭の花火（11月5日、石の広場で）＝川上真生撮影

Hello! 先端研究

初期宇宙の銀河進化を観測

二つの最先端望遠鏡が協力

橋本拓也助教

宇宙は今から138億年前に誕生し、その直後にビッグバンを起こして今も膨張を続けている。その過程で星が生まれ、星の集団である銀河ができた。そして、銀河は互いの重力で引き合うことで銀河の集団（銀河団）を作った。現代宇宙論ではそう考えられている。

では、最初の銀河や銀河団はいつできたのだろうか。橋本拓也助教（数物系）らの研究チームは、こうした宇宙の根源的な謎の解明に挑んでいる。私たち人類も宇宙の一員であることを思えば、宇宙の進化を知ることは、人類の来歴を知ることでもあると言える。

橋本助教らは地球から131・4億光年離れた原始銀河団を観測。銀河の候補が多い「コア領域」から四つの銀河を検出することに成功し、今年9月の日本天文学会秋季年会で発表した。

131・4億光年離れた天体の観測は、その天体の131・4億年前の姿を見たということだ。この銀河団は観測された中で最も遠い、つまり最も古い銀河団だった。

観測の結果、四つの銀河は一辺が3万6000光年（地球がある天の川銀河の直径の4分の1相当）の四角形領域の中にあった。これは、宇宙のスケールでみると、極めて高い密集度になる。

また、コア領域では星の成長と死のサイクルが急速に進んでいることも分かった。観測した四つの銀河のうち三つから、塵が出す電波が検出されたからだ。

重い星は一生を終える際に超新星爆発を起し、さまざまな元素を宇宙空間にまき散らす。その元素が結びついて塵となり、新しい星の材料になる。

「コア領域」以外から塵は検出されず、銀河の密集部分でのみ星の生と死のサイクルが進んでいると考えられた。

また、コンピューターシミュレーションを実施し、数千万年後には四つの銀河が一つに合体すると予想された。

橋本助教らの研究から浮かぶのは、星の誕生と死が活発で、銀河が急速に進化する初期宇宙のダイナミックな姿だ。

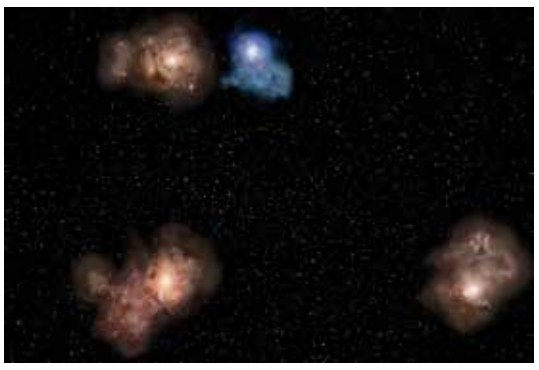
今回の観測を担ったのはジェームズ・ウェッブ宇宙望遠鏡（JWST）と、南米チリの大型電波望遠鏡アルマ望遠鏡。JWSTは米航空宇宙局などが中心に運用し、アルマ望遠鏡は日本の国立天文台などが中心に運用している。

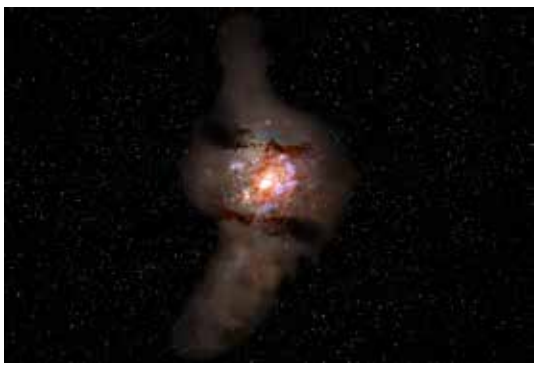
これら二つは従来の宇宙望遠鏡や電波望遠鏡と比べ、それぞれおよそ100倍の感度を持つ。また、細かな構造を見極める分解能も桁違いに高い。

今回はJWSTで四つの銀河が出す酸素イオンの光を検出し、アルマ望遠鏡でこのうち三つの銀河から塵の出す電波を検出することができた。

橋本助教は「銀河進化の始まりを理解することは、宇宙の初期を理解する上で大切だ。銀河は宇宙の基本的な構成要素だからだ。JWSTとアルマ望遠鏡を組み合わせた観測で、銀河や銀河団が成長する様子を捉えることができた。他の銀河団についても、同様の手法で詳しく調べていきたい」と話した。

（青野心平＝第2類1年）





観測された銀河団の密集部分の想像図（上）と数千万年後の予想図＝いずれも国立天文台提供

卒業生からの手紙

できる間に人生を楽しもう

健康運動指導士 永松 旬 さん

「トップアスリートと同じ景色が見たい」という思いで、それまで本格的な競技経験がほとんどなかったにもかかわらず、筑波大に入学と同時に陸上競技部の門をたたきました。そして、箱根駅伝に出場した経験のある選手が何人もいる長距離走のチームに入りました。しばらくは、朝練習に出ると疲れて学生宿舎で二度寝してしまい、授業にもまともに出られない有り様。それでも、夏合宿を何度も経験し、上級生になると次第に練習をこなせるようになっていました。陸上競技場のトラックを、チームメートと隊列を組んで走った感覚は、今でも自分の中に鮮明に残っています。

卒業後は、スポーツを通じた国際交流に関する仕事に就きたいと思い、在学中に学んだ英語に磨きをかけ、海外旅行の添乗員をしながらスポーツの国際大会でリエゾン（選手団の随行通訳）の仕事を始めました。その後、働きながら東京外国のスポーツ政策について調べる仕事に就き、五輪やパラリンピックなどの国際大会で日本選手団のサポートもさせていただきました。さらに、2020年東京五輪・パラリンピックの開催が決まってからは、民間企業に転職し、大会スポンサーの企業に対するコンサルティングの仕事も経験しました。

ところが、大会の開催も近づいた2019年に転機が訪れます。陸上競技で鍛えた自分の体力を過信していたのでしょうか、過労で体が動かなくなり、当時働いていた会社をやむなく退職しました。しばらく療養生活を送っていたのですが、22年に筑波大体育系の「ヒューマン・ハイ・パフォーマンス先端研究センター」（ARIHHP）の職員として、24年ぶりにつくばに戻ることになりました。

現在は、ARIHHPでの任期を満了し、野村武男名誉教授が代表を務める特定非営利活動法人「つくばアクアライフ研究所」に就職し、筑波大と同じ茨城県内にある取手市の取手グリーンスポーツセンターで健康相談室業務にあたっています。地域の方々の健康相談や運動指導が主な仕事です。目標であったスポーツを通じた国際交流からは少し方向転換しましたが、これまでの経験も生かせる今の仕事にやりがいを感じています。

転職も当たり前となりつつある昨今の社会では、予想できないことも多いと思います。やりたいことがあれば、それができる時に全力でチャレンジしてみてはいかがでしょうか？ そうすることで、道が開けてくることもあると思います。時には、総合大学である筑波大で培った人脈が助けてくれるかもしれません。

最後に、私の好きなスペイン語のことわざを紹介します。Mientras dura, vida y dulzura.（それができる間に、人生を楽しもう）。

（平成9年度比較文化学類卒、平成18年度体育研究科修了、写真は加藤緑撮影）

14年ぶり王者奪回

全日本女子学生優勝大会

学生の団体日本一を決める全国女子学生優勝大会が11月12日、春日井市総合体育館（愛知県春日井市）で開かれ、筑波大女子が14年ぶり8回目の優勝を果たした。有田祐二監督（体育系・准教授）は「4年生が主導し、部をよくまとめていた。重圧も大きかった中でよく頑張った」と語った。（髙元愛香）

念願の優勝を果たし、笑顔を見せる女子剣道部員ら＝女子剣道部提供

剣道

決勝戦は昨年優勝した鹿屋体育大と対戦した。昨年は準々決勝で敗れた相手との雪辱戦となった。

筑波大の先鋒は7月の全日本女子学生選手権で優勝した川合芳奈（体専3年）。相手がメンを打とうと上げた手元にコテを決め、そのまま一本勝ちした。

続く次鋒戦から副将戦までは3戦連続して引き分けとなり、1―0と最小リードで大将戦を迎えた。

大将戦は笠日向子（同3年）が高校の先輩だった大嶋友莉亜と対戦した。開始1分半に引きドウを決められ、一本負け。1―1に追い付かれ、試合は代表戦に持ち込まれた。

代表戦は川合と大嶋が対戦した。既定の5分と休憩を挟んで行われた延長戦3分では決着がつかず、再延長戦にもつれ込んだ。

再延長戦の「はじめ」の合図とともに大嶋がメンを打ち込もうとした。そこに生まれた一瞬の隙に川合がメンを決め、筑波大を優勝に導いた。

筑波大は例年、団体メンバーのポジションを固定せず、対戦校に応じて配置してきたが、今年度は4年生の意思でポジションを固定する戦略を取った。

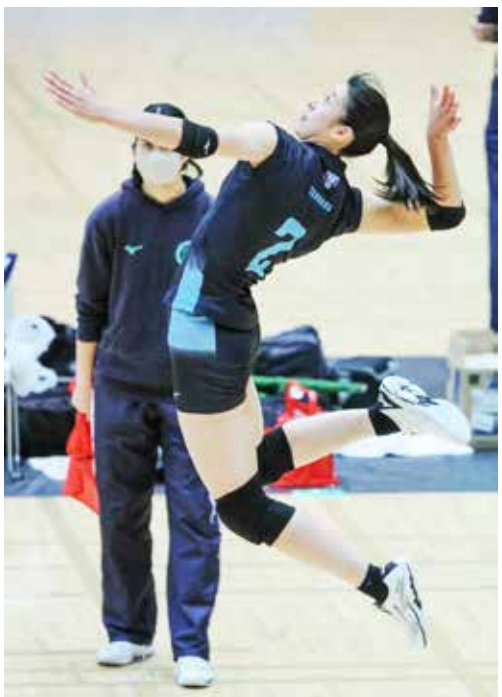
有田監督は「ポジションを固定したことで試合の流れを予想しやすくなり、選手が心の余裕を持って試合に臨めた」と勝因を分析した。

主将の奥谷茉子（同4年）は「レギュラー以外のメンバーも一丸になって練習に取り組んできた。部全員でつかみ取った優勝だ」と語った。

女子インカレ優勝　4年ぶり9回目

大山が最優秀選手賞

全日本学生選手権（インカレ）が11月27日～12月3日、大田区総合体育館（東京都大田区）などで行われた。筑波大女子は3連覇を狙った東海大をストレートで破り、4年ぶり9回目の優勝を飾った。リーグ戦の春秋連覇と合わせて今季三冠となった。また女子の最優秀選手賞とブロック賞に主将の大山遼（はるか）（体専4年）、スパイク賞に本田凛（同2年）、セッター賞に熊谷依奈（同1年）、リベロ賞に中村悠（同3年）が選ばれた。試合ごとに最も印象的だった選手にMIP賞が贈られ、決勝戦は佐藤淑乃（同4年）が受賞した。（山本貴世）


相手コートに力強いサーブを打ち込む佐藤＝女子バレー部提供

バレー

筑波大は決勝の第1セット、セッター・熊谷の安定したトスからミドルブロッカー・大山の速攻が決まるなど、多彩な攻撃で相手を翻弄。東海大のミスも重なり、25―19で先取した。

続く第2セット序盤は、東海大に一時4点のリードを許した。しかし、ピンチサーバーとして入った徳永桜（同4年）のサーブが相手のプレーを乱し、その隙を突いてアウトサイドヒッター・佐藤がバックアタックを決めるなど、4連続得点で同点に追い付いた。勢いに乗った筑波大がそのまま逆転し、25―22で奪った。

第3セットは一度もリードを奪われることなく、試合が進んだ。東海大はフェイントなどで攻撃に変化をつけてきたが、これにも対応し、点差を広げた。最後は佐藤がセンターからアタックを決め、25―17でストレート勝ちを決めた。

試合後、大山は「4年間の最後で、目標だった日本一になれてうれしい。Vリーグで活躍していくために、今後は攻撃の幅を広げたい」と振り返った。大山はVリーグ女子1部のJTマーヴェラスへの内定が決定している。

中西康己監督（体育系・准教授）は「練習の成果が大事な場面でしっかり発揮されていた。今後は4年生が抜けて新チームとなるが、4月までにチームの特徴作りと選手の競技力向上を軌道に乗せたい」と話した。

日米No.1対決

ハワイ大に惜敗

【つくばカピオ（つくば市竹園）で山本貴世＝国際総合学類1年、写真も。12面に関連写真】筑波大と米ハワイ大の男子バレーボール部が11月15日につくばカピオ（つくば市竹園）で対戦した。創基151年筑波大学開学50周年の記念事業の一つで、筑波大が主催するホームゲーム「TSUKUBA LIVE！」として開催された。筑波大は昨年度の大学選手権（インカレ）優勝校。ハワイ大も昨季の全米王者で、日本一対全米一の戦いとなった。筑波大はハワイ大に2―3で敗れたが、約1130人が訪れ、会場は熱気に包まれた。

今回は「TSUKUBA LIVE！」として、初の国際試合。開始前には筑波大アカペラサークル「Do―Wop」や筑波大応援部「WINS」によるパフォーマンスが行われた。始球式では永田恭介学長がサーブを打ちこみ、ハワイ大の選手を歓迎した。

試合は一進一退の白熱した展開となった。

第1セットは23―25でハワイ大に先取されたが、続く第2セットは26―24で筑波大が奪取した。

第3セットはハワイ大の高い位置からの攻撃に押される展開となり、20―25で落とした。後がなくなった筑波大は第4セット、橋本岳人（体専4年）の鋭いスパイクや牧大晃（同2年）の粘り強いレシーブなどで25―22と奪い返した。

しかし、最終第5セットはハワイ大の勢いが上回り、7―15で失った。

主将の柳田歩輝（同4年）は「高さのあるチームと戦えて良い経験になった。観客の皆さんの応援が励みになった」と話した。

秋山央監督（体育系・准教授）は「ハワイ大の方が実力は上だと感じる場面が多かったが、何とか食らい付いた試合だった。今後はディフェンス力の強化に努めたい」と語った。

ハワイ大を相手にスパイクを打つ橋本（11月15日、つくばカピオで）

関東大会　2年連続出場

上武大に敗れ神宮は逃す

第19回関東地区大学選手権が11月6～9日、横浜スタジアム（横浜市中区）で開かれた。関東地区の5大学野球連盟から計10校が出場し、上位2校が明治神宮大会への出場権を得る。筑波大は2年連続7回目の出場を果たしたが、2回戦で上武大に逆転負けし、神宮出場を逃した。上武大が2年連続6回目の優勝を果たした。（島崎翔＝医学類6年、川上真生）

野球

筑波大は11月6日の1回戦で流通経済大と対戦。先発の国本航河（体専2年）は「初めてのマウンドは思ったより硬かったが真っすぐは走っていた」と最速153キロを記録。四回までに2点を失ったものの、その後は寺澤神（同4年）と村上滉典（同4年）の2投手の継投で流通経済大打線に追加点を許さなかった。

試合は四回表に松永陽登（同1年）が放った中越え2点適時打などにより5―2で勝利した。

7日の2回戦は上武大と対戦した。先発の村上は前日からの連投となったが、変化球を低めに集めて八回まで2点に抑えた。

打線は六回裏に米田友（同2年）の2点本塁打が飛び出して、3―2と逆転した。試合はそのまま九回表を迎えた。

しかし、2死二、三塁から内野安打に悪送球が重なり逆転を許した。九回裏にチャンスを作るものの得点できず、3―4で敗退した。

主将の西浦謙太（同4年）は「強豪の上武大との対戦だったが、チーム全体で相手に向かっていく気持ちを持って試合に臨めた。ピンチの時も落ち着いて粘り強く戦ったが、相手が一枚上手だった」と話した。

上武大戦で力投を見せたエースの村上投手＝硬式野球部提供

◆秋季リーグは2位で終了

首都大学秋季リーグが10月22日に閉幕した。1部リーグの筑波大は9勝4敗で2位となり、2年連続で関東地区大学選手権への出場を決めた。

川村卓監督（体育系・准教授）は「夏に社会人など強いチームとの試合を重ねた。相手が仕掛ける作戦を想定してプレーに臨むうちに、想定外の事態に対する心構えもできるようになった。春に比べて接戦で競り負けることも少なくなった」と語った。

筑波大からは次の3人が秋季リーグのベストナインに選ばれた。▽氷戸涼世（三塁手・体専3年）▽生島光貴（三塁手・同4年）▽石毛大地（外野手・同4年）。

インカレ男女とも準優勝

女子　王者相手に健闘

全日本学生選手権（インカレ）が11月4～8日に函館アリーナ（北海道函館市）で行われた。男女各32チームが出場した。筑波大は男女ともに決勝に進出したものの、準優勝に終わった。優秀選手賞を女子では髙橋弥那（体専4年）と水谷朱里（同2年）が、男子は大山翔伍（同3年）と所凌央（同3年）が受賞した。特別賞には女子で外口若奈（同2年）、男子で大浦和真（同3年）が選ばれた。（山本貴世）

ハンド

■女子

女子の相手はインカレ9連覇中の大阪体育大。前半は1点差と同点を繰り返すシーソーゲームが続いた。27分に水谷が大阪体育大の硬いディフェンスを破ってシュートを決め、そのまま13―12と筑波大が1点リードして終えた。

しかし後半に入ると、大阪体育大が厳しい攻めを展開。16分までに4連続得点を決められるなど5点差をつけられた。その後、髙橋らの活躍で1点差にまで追い上げる場面もあったが、最後は24―26で振り切られた。

2008年以来の優勝を惜しくも逃す結果に、主将の髙橋唯（同4年）は「悔しさはあるが、全員が全力で楽しみ、力強く熱く戦う筑波らしいプレーができたと思う。来年は必ず優勝してほしい」と話した。

平本恵介コーチ（コーチP3年）は「失点は抑えられたが、攻撃で慎重になりすぎて得点が伸び悩んだ。インカレ決勝の舞台で勝つことの難しさを痛感した」と語った。

■男子

男子の相手は3年連続6回目の優勝がかかった中央大。前半は終始押される展開が続いた。

10分には大浦が相手のディフェンスをかいくぐった痛烈なミドルシュートを決めるなど、反撃も見せたが、相手ゴールキーパーの好守もあり、11―13で折り返した。

後半に入ると、所や大浦が躍動。大浦は前半の2得点と合わせ計9得点し、この試合の最多得点を記録した。所も後半に4得点したが、最後は中央大に突き放され、26―31で敗れた。

藤本元監督（体育系・准教授）は「この1年、多くの時間を費やして練習を重ね、大会前も良い準備ができていたが、相手チームの方が一枚上手だった。1年間よく戦ってくれた」と部員をねぎらった。

関東大学リーグ 6年ぶり優勝

MVPに山内、新人賞に内野

【筑波大学第一サッカー場（つくば市天久保）で久玉佳純＝比較文化学類3年】

関東大学リーグ戦1部リーグの筑波大は11月4日、筑波大学第一サッカー場で東京国際大と対戦。1―0で勝利し、6年ぶり16回目の優勝を果たした。筑波大にとってはこの試合が今季リーグのホーム最終戦。筑波大学学園祭（雙峰祭）の開催とも重なり、2000人を超える大観衆が集まった。22節のうち2節を残しての優勝決定で、会場は大歓声に包まれた。同19日の閉幕後、リーグ戦最優秀選手（MVP）に主将のMF山内翔（体専4年）、新人賞にFW内野航太郎（同1年）が選ばれた。笹嶺（ブライトン）が在籍していた17年以来6年ぶりの優勝を飾った。

サッカー

筑波大は4月に始まった今季リーグ戦で順調な戦いを進め、11節までの前期を8勝3敗0分けの勝ち点22と首位で折り返した。後期も首位を維持したまま、ホーム最終戦を迎えた。

相手はリーグ2位の東京国際大。勝利すれば優勝が決まる一戦となった。

立ち上がりは東京国際大に押し込まれる場面もあったが、前半29分、DF池谷銀姿郎（同1年）からのクロスに反応したMF角昂志郎（同3年）が相手DFを振り切ってシュートを決め、試合の流れを引き寄せた。

37分には池谷のパスからMF山崎太新（同2年）がシュートを打つなど試合の主導権を渡さないまま、前半を終えた。

後半も追加点を奪う姿勢を示しつつ、冷静な守備もみせ、そのまま先制点を守り切って1―0で勝利。三

MVPに選ばれた主将の山内＝筑波大学蹴球部提供

今年のチームスローガンは「共頂」。その通り、ホームゲームで、大勢のファンと共に頂点をつかんだ。

筑波大は続くリーグ戦残り2試合も連勝した。

その中でも最終節の明治大戦は、互いに引かない展開のまま後半に入った。同6分、ゴール前の攻防で角がPKを獲得し、自らゴール左下に決めた。その後は相手の猛攻を守備陣が高い集中力で抑えて1―0で勝利し、有終の美を飾った。

小井土正亮監督（体育系・准教授）は「現部員にとっては初の大きなタイトル。選手たちの日ごろの取り組みが、結果という形で残ってよかった」とねぎらった。

主将の山内は「大会を通して、チームとして成長することができた。来年は一層マークされるようになると思うが、進化をし続けてほしい」と語った。

体重別団体 男子10年ぶり優勝

「誰とも技で勝負」を体現

全日本学生体重別団体優勝大会が10月21日、22日にベイコム総合体育館（兵庫県尼崎市）で行われた。筑波大は男子が10年ぶり4度目の優勝を果たした。決勝は明治大と対戦し、4―1で勝利した。女子は5位だった。

（横山心咲＝比較文化学類1年）

柔道

男子、女子いずれも体重別の7人による総当たり戦で、先鋒、次鋒、五将、中堅、三将、副将、大将の順に戦い、勝ち星の多い方が勝ち上がる。1試合は4分で、4分間で勝負がつかなければ引き分けとなる。

男子は21日の初戦で東洋大と対戦。先鋒、次鋒戦を経て1―0とリードしたが、9月のアジア大会男子66キロ級で優勝したエース、田中龍馬（体専4年）が五将戦で一本負け。その後中堅、三将、副将戦を経て2―2で大将戦を迎えた。

初戦から手に汗握る接戦となったが、小畑大樹（同4年）が一本を奪い3―2で勝利した。

岡田弘隆監督（体育系・准教授）は「これで、チームに良い緊張感が生まれた」と振り返る。

2回戦の福井工業大には7―0で完勝した。

22日の3回戦の相手は國學院大。先鋒・田中龍馬は技ありで敗れたが、続く6人は落ち着いた試合運びを見せ、5―1で快勝した。

続く4回戦は昨年度優勝校の天理大。先鋒、次鋒ともに引き分けたが、得点を期待された五将・旭征哉（同4年）がまさかの一本負け。中堅・田中航太（同3年）が一本を取り返したが、三将、副将、大将は引き分けで同点、同内容となった。

このため代表戦にもつれ込み、抽選で大将・白金宏都（同2年）が出場したが、勝負は延長戦へ。6分を超える長い試合の末、白金が相手を自分の頭越しに投げる捨て身技の隅返で技ありを奪って勝利した。「白金らしいしぶとい柔道をやりきってくれた」と岡田監督は評価した。

準決勝の相手は国士舘大。パリ五輪内定選手を中心に、各階級の有力選手をそろえた優勝候補だ。

ここでは先鋒・田中龍馬が技ありで優勢勝ちし、幸先良い滑り出しとなった。しかし、中堅・長谷川功斉（同4年）が相手エースに一本負け。三将・田中龍雅（同1年）の試合終了時点で1―1。そのままでは内容負けになるところだったが、副将戦で小畑が横四方固で一本を奪った。続く大将・白金は引き分けに持ち込み、2―1で激戦を制した。

決勝は明治大との対戦となった。先鋒・田中龍馬は寝技で関節を決めて一本勝ち。次鋒・戸高淳之介（同3年）は引き分けたが、五将・花岡晴琉（同2年）と中堅・田中航太が連続して一本勝ちを決めた。三将・田中龍雅は残り9秒で技ありを取られて敗れたが、この時点で筑波大の優勝が確定した。残り全員が一本負けして勝利数で並んでも、内容勝ちとなるからだ。

それでも選手は気を緩めず、副将の小畑は引き分け、大将の白金は隅返で技ありを奪って勝利し、10年ぶり4度目の頂点に立った。

主将の長谷川は「主将になった時から、日本一となり、全員で筑波大の宣揚歌を歌って監督を胴上げするイメージを持ってきた。大きな目標を仲間と達成できてうれしい」と語った。

岡田監督は「誰であろうと組んで技で勝負する、筑波大の目指す正攻法の柔道を選手たちは体現してくれた。部員全員で勝ち取った勝利だ。度重なる大会で選手のけがも増えているが、その程度を見極めつつ、男女ともに今後の練習に励んでほしい」と語った。

10年ぶりの優勝を決めた柔道部男子＝柔道部提供

関東大学対抗戦 4位

大学選手権出場決める

ラグビー

関東大学対抗戦が9月9日から12月3日まで行われた。Aグループの筑波大は4勝3敗（勝ち点20）で8大学中4位となり、上位5校が進出する全国大学選手権への2大会連続出場を決めた。

対抗戦は8大学の総当たりで行われた。

筑波大は初戦で慶應義塾大と対戦し、21―18と白星スタートを切った。続く早稲田大、明治大、帝京大には3連敗したものの、成蹊大に73―7、青山学院大に68―0と快勝。3勝3敗とし、12月2日に立教大との最終戦を迎えた。

筑波大は試合開始10分、主将の谷山隼大（体専4年）のトライで先制し、その後も着実に得点を重ねた。

37分には、ハーフライン付近でのラックから出たボールを谷山が受け取り、22メートルライン手前まで独走。パスを受けた高橋佑太朗（同2年）が更に相手をかわしてトライするなど、前半を35―0で終えた。

後半開始9分、立教大に初トライを許すも、黒澤稔生（同4年）が連続トライを決めるなどが連続トライを決めるなど攻撃の手を緩めず、68―10で勝利した。

谷山は「試合に負け続けている時にこそチームを成長させることを意識し、対抗戦後半は良い結果を残せた」と振り返った。

嶋﨑達也監督（体育系・助教）は「昨年よりもけが人が多く、レギュラー争いが激しいシーズンになった。大学選手権では、目の前の一戦一戦に最高の準備をして臨みたい」と語った。

（青野心平＝第2類1年）

青山学院大戦で相手陣地へ攻め込む谷山＝ラグビー部提供

スポーツの顔

兄を追い 高みを目指す

柔道

10月の学生体重別団体優勝大会で10年ぶり4度目の日本一に輝いた筑波大柔道部男子。その歴史的快挙に貢献した新星だ。9月の学生体重別選手権と11月の講道館杯の男子73キロ級では、いずれも準優勝を果たした。背負投が得意で、ここぞというタイミングで技を繰り出す、小気味よい柔道が持ち味だ。

佐賀県出身。4歳の時に、3歳上の兄・田中龍馬（体専4年）の後を追って柔道を始めた。「1対1での試合を通して練習の成果や自分の実力が目に見えて分かること」が柔道の魅力だという。

兄・龍馬は中学3年時に全国中学校柔道大会の55キロ級で優勝。自分も中学で日本一を目指したが、2年時は50キロ級で、3年時は55キロ級でそれぞれ3位に終わり、兄の背中を追い続けた。

高校は地元の柔道の強豪、佐賀商業高校に進学。柔道部入部当初から、コロナ禍が行く手を阻んだ。選手が集まって練習することができなかったが、「周りに差をつける時だ」と前向きに考え、ウエートトレーニングで体づくりに努めた。

1年生の6月に対面での活動が解禁されると、平日4時間半、休日8～9時間のハードな練習をこなした。

同8月には、自主練習ができるように両親が自宅に10畳の道場を設置してくれた。3歳下の弟と自宅で組み合って実践的な練習を重ね、筑波大に進学した兄からはビデオ通話を通してアドバイスをもらった。

自主練のかいもあり、昨年3月の全国高校選手権では2年生ながら73キロ級で優勝。「世界で戦える選手になる」と決心した。3年生となった同6月にはオーストリアジュニア国際、同8月にはエクアドルで開かれた世界ジュニア選手権の同級に貢献した。

試合後は2カ月間練習を休み、治療に努めた。「シニアの中でも戦えるようになる」という思いが治療の支えになった。

高校卒業後に選んだ道は筑波大。世界で活躍する選手を輩出してきた柔道部の環境に憧れた。また、自主性が尊重される筑波大で自身の生活や練習を管理できるようになれば、選手としての強さにもつながると考えた。

練習時間は高校の半分程度になったが、監督や先輩の指導を受けながら、質を重視した練習を積んでいる。一人暮らしのため、試合前の減量も、自身で管理している。

9月のアジア大会（中国・杭州）男子66キロ級で優勝した兄は良き相談相手だ。「兄は自分より上のランクで戦っている。技術面も含め、一番話しやすい存在だ」という。

当面の目標は「来年の世界選手権で優勝すること」。弟も佐賀商業の柔道部員。三兄弟は時にライバル、時に仲間として切磋琢磨する。更なる高みを目指す若き柔道家の今後が楽しみだ。（横山心咲＝比較文化学類1年、写真は本人提供、左は兄・龍馬）

体重別団体優勝に貢献

田中龍雅（体専1年）

若者の発想で地域を活性化
筑波大高大連携事業で

筑波大と茨城県潮来市、県立潮来高校の3者による高大連携事業が9月から11月にかけて実施された。高校生がフィールドワークやワークショップを通じて地域の課題を見つけ、大学生の助言を受けながらその解決案を提案する。地域の人材育成や活性化を目的に、今年で4年目を迎えた潮来市での同事業を密着取材した。

（シダス・ボーダン＝人文学類2年、川上真生）

筑波大の高大連携事業は2007年、大澤義明教授（シス情系）と吉瀬章子教授（同）ら社会工学分野の研究者が中心となって始まった。同事業は自治体主導型で、各自治体からの要望に合わせたテーマが設定される。高校生の提案が自治体に採用されたケースもある。今年度は県内外の4自治体で行われた。

潮来市では20年に同事業が始まり、潮来高校地域ビジネス科の生徒たちが参加してきた。

今回は潮来高校生と筑波大生が一緒になって六つの班（各班5～7人）を作った。各班には「広がるモビリティ」「特産品を盛り上げよう」などのテーマが割り振られ、マーケティングの知識を生かした地域活性化策の提案を目指した。

データを基に現状分析

生徒たちが潮来市の現状を知るため、9月5日にオンライン授業が開かれた。

まず、筑波大都市計測実験室の青木日花さん（社工4年）が高大連携事業の趣旨やデータ分析に使う地域経済分析システム（RESAS）について説明した。

RESASは経済産業省などが提供しているシステムで、全国の市区町村単位で産業構造や人口形態、人流などのビックデータを簡単に可視化できる。現在のデータを基に、将来を予測することなども可能だ。

生徒たちは各班に分かれ、大学生のサポートを受けながら、RESASのデータなども参考にして潮来市の良い点や改善点を考えた。

「広がるモビリティ」がテーマの班は現在と25年後の潮来市の人口をRESASで比較。少子高齢化が更に進むことを確認した。

現場に足を運ぶ

続いてフィールドワークとワークショップが9月25～27日に開かれた。

25日のフィールドワークでは、潮来市内にある関東鉄道潮来営業所や道の駅いたこ、特産物であるまこも（マコモダケ）の生産地など計6カ所を訪問した。

「広がるモビリティ」班は関東鉄道の担当者を取材。利用者の約7割を高齢者が占めていること、運転免許返納者（75歳以上）には潮来市と協力して広域バス回数券2万円分を贈っていることなどを聞いた。

翌日のワークショップでは、オンライン授業やフィールドワークを踏まえて、提案を考えた。

「広がるモビリティ」班は「少子化で小中学校の合併が進むこと」を課題として挙げた。10年後には「学校が遠くなり、通学にスクールバスが必要になる子供が増える」と予測し、スクールバスの運行を提案することに決めた。

潮来高校2年の立原実南美さんは「小中学校合併という身近な課題について、当事者のことを考えた提案ができた」と振り返った。

27日には、関彰商事（本社・茨城県筑西市／つくば市）の関正樹社長による「地元企業とまちづくり」をテーマにした講演も行われた。関社長は「寄付による社会貢献のみならず、今後は仕事を通じて地域に貢献していきたい」と話した。

現場に出て生の声を聞く高校生ら（9月25日、関東鉄道潮来営業所で）＝川上真生撮影

潮来市唯一の高校　地元の課題を探る

住民らに提案披露

生徒たちが練り上げた地域活性化策は10月22日、同市内の潮来公民館で開かれた「潮来まちづくりシンポジウム2023」で披露された。シンポジウムには潮来市議10人も含め自治体関係者や地域住民ら約60人が来場した。

「広がるモビリティ」班の提案をはじめ、「潮来の魅力を感じてもらう季節別の宿泊ツアー」や「まこもを使ったラーメン」など6班の提案が次々に発表された。

ワークショップでは大学生と高校生が協力して提案をまとめた（9月26日、潮来高校で）＝川上真生撮影

来場者を対象にしたアンケートの結果、道の駅いたこのPR策をまとめた「それいけ！道の駅～潮来を救うのはU18～」が最優秀賞に選ばれた。

SNS（ネット交流サービス）の活用に長けた高校生たちに、道の駅の広報活動を手伝ってもらうべきだとした。また、販売されているオリジナル商品のヨーグルトの容器側面が無地なことについて、「おしゃれじゃない。見た人は警戒しそう」と指摘し、パッケージのイラストコンテスト開催を提案した。

道の駅の魅力を若者が発信

発表した潮来高校2年の片岡葉奈さんは「道の駅の魅力が若者に伝わるような提案をした。地域のことを自ら知ろうとする姿勢を今後も大切にしたい」と話した。

潮来市シルバー人材センターに所属してまこも栽培に携わる町田信夫さん（78）は「提案にあった『まこもラーメン』は、まこもの認知度を上げる突破口になるかもしれない」と期待感を示した。

続いて、原浩道・潮来市長や堤盛人教授（シス情系）、鹿島アントラーズ地域連携グループマネージャーの岡本文幸さんらによる「潮来のまちづくり・ひとづくりをつなぐ」と題したクロストークが行われた。

最優秀賞を受賞した「それいけ！道の駅～潮来を救うのはU18～」（10月22日、潮来公民館で）＝川上真生撮影

岡本さんは「ヨーグルトのパッケージ案を募集するアイデアは斬新だった。商品PRの面では協力できるかもしれない」と話した。

シンポジウムの最後には「これからの潮来を担う若い世代の意見を反映すること」などを盛り込んだ提言書が高校生から原市長に手渡された。提言は潮来市のまちづくり計画に生かされる予定だという。

大学生も発想の具体化手伝う

今回の事業の学生責任者を務めた青木さんは「高校生の突拍子もないアイデアに大学生が向き合い、具体化のお手伝いができた。学生にとっても柔軟な発想をすることの大切さを知る機会になった」と語った。

主導した大澤教授は「まちづくりと人づくりは連動している。日本全体で人口減少や過疎化が進んでいくと予想されるが、若者がまちの担い手となって活動することには意義がある」と振り返った。

地元の声

◆採用したい提案多い◆

【原浩道・潮来市長】

提案のレベルは年々向上している。すぐにでも採用したいアイデアも複数あった。高校生が地域の現状を知り、解決したいという気持ちが芽生えれば、地元への愛着も増す。高校生も含め市民が主役のまちづくりを目指していきたい。

◆開かれた学びできた◆

【小澤茂幸・潮来高校長】

生徒たちが大学生や地域住民と交流し、身近な課題解決に取り組むことで社会に開かれた学びができていると実感している。潮来高校は市内唯一の高校だ。今後も潮来に残り、まちづくりに携わる人材が育ってくれたらうれしい。

留学生の声

母国の地震学発展に尽くしたい

中国　高航宇　地球科学学位プログラム

中国北西部の新疆ウイグル自治区ウルムチ出身。昨年4月から地球科学学位プログラムに在籍し、地震研究に取り組んでいる。

「日本の知見を中国に持ち帰り、地震学研究を発展させたい」と意気込む。

きっかけは小学5年生の時の体験だ。2008年5月、四川省北部を震源に、マグニチュード（M）8の巨大地震が発生した。日本では「四川大地震」と呼ばれ、死者・行方不明者は約9万人に達した。

居住地は震源から離れており、自身が被害を受けることはなかったが、死者数の増加や建物の崩壊など被害状況を知らせる連日の報道に衝撃を受けた。

「なぜ地震は発生するのか」「どうすれば自分と家族の命を守れるのか」と疑問が湧き、地震について関心を持つようになったという。

だが、小学校では、ロボット同士を競わせる「ロボットコンテスト（ロボコン）」クラブに入り、ロボットの製作やプログラミングに熱中した。高校生の時には国際的なロボット競技大会に、チームの中心メンバーとして出場。アジア太平洋地区大会で優勝し、世界大会でも予選ブロック1位で通過。「絶対に優勝する」と意気込んで臨んだ決勝は、7位にとどまった。

そんな中、大学では心機一転、地震学を学ぼうと思い立った。「ロボット製作で培ったプログラミングの技術を生かせる。何より、多くの人の命を救えると思った」と振り返る。

まずは、陝西省の長安大学で物理探査の手法を学んだ。地表で人工地震を起こし、その地震波を観測して地下構造を調べたり、衛星を使って地殻変動を捉えたりした。大学院では本格的に地震学を極めたいと考える中で、日本の地震研究は世界の最先端だと知った。

その中でも、地震の破壊過程を調べる革新的な手法を開発した筑波大の八木勇治教授（生環系）の研究に感銘を受け、八木教授が教える地球科学学位プログラムに進学した。

講義は日本語で、専門用語も多く難しい。だが、教員や日本人学生にも助けられながら、理解を深めている。研究だけでなく進路の相談にも親身に対応してくれる八木教授は、「日本における父親のような存在だ」という。

現在は10年に中国西部の青海省で発生した「青海地震」のメカニズム解明に取り組んでいる。

博士課程にも進学し、日本と中国を股にかけて活躍する研究者となることを目指す。（嵩元愛香＝心理学類3年、写真は本人提供）

ダンス部自主公演開催

和太鼓の生演奏とコラボ

「漣」の中盤で、心が癒え希望が見える様子を表現するダンス部員ら

筑波大ダンス部の自主公演「DANCE EXPRESS vol. 17『今、蒼炎（そうえん）をあげる』」が11月12日、中央体育館ダンス場で行われた。つくば市を拠点に活動する和太鼓ユニット「蒼」との初コラボレーションを含む全9本のプログラムを披露した。コロナ下で開いた一昨年と昨年はオンライン配信されたが、今年は観客に生演奏をその場で楽しんでほしいという思いから、対面のみで開催された。

公演は2部構成。テーマの「今、蒼炎をあげる」は、人が高みを目指す時の情熱を炎に例えている。

第2部で披露された「燎」では、炎のように激しい情熱を和太鼓とのコラボにより表現した。ダンス部の小林果愛さん（知識3年）は、「和太鼓の迫力に負けないよう、力強く踊った。目線など細かいところまで意識した」と語った。

第2部の最後は、8月に神戸市で開かれた全日本高校・大学ダンスフェスティバルで奨励賞を受賞した創作ダンス「漣（さざなみ）」のリニューアル版を披露した。東日本大震災後に1人の女性が海に向かって祈る写真をモチーフに現在の3年生が中心となって創った作品だ。

OB・OGを含む総勢23人が、思いが相手に届かなくとも、諦めずに伝え続ける姿勢を表現した。神戸の時と比べ、出演者全員の衣装をそろえるなどの変更を加えている。

小林さんは「神戸では思うような結果が出ず、大幅な改変が必要だと焦った。でも、先輩方からオリジナル版もいいという意見をもらい、その良さを生かしつつリニューアルした。来場者から『神戸の時より好きだ』などの感想を頂き、励まされた」と話した。

ダンス部は来年3月、かめありリリオホール（東京都葛飾区）で記念公演を開く。要事前予約。

（吉川椛＝第2類1年）

筑波大 きき酒選手権初優勝

「大学生活の答え合わせができた」

積まれた酒樽の前で祝杯を上げる石川さんと嵩元編集長＝嵩元編集長提供

日本酒の知識や利き酒の腕前を競う「全国きき酒選手権大会」が10月28日にベルサール汐留（東京都中央区）で開かれ、大学対抗の部で筑波大が初優勝を飾った。同大会は日本酒造組合中央会の主催。日本酒文化の普及・振興を目的に1981年に始まり、大学対抗の部は2013年に設置された。

大学対抗の部は2人1組で競う。今回は15校19組が参加し、筑波大からは国際唎酒師（ききさけし）の資格を持つ石川舞都さん（国際4年）と嵩元愛香・本紙編集長（心理3年）が出場した。

石川さんは筑波大生が運営するバー「Cafe & Bar Trigger」（つくば市天久保）の元スタッフで、嵩元編集長がTriggerの新店長オーディションを取材したことを契機に知り合い、本大会への出場が実現した。

競技方法は「筆記試験」と「きき酒競技」の2種類。筆記試験では日本酒に関する知識がマークシート形式で問われた。きき酒競技では7種類の日本酒が2回提供された。1回目で7種類の味や香りを確かめ、2回目で同じ酒を当てるマッチング法で得点を競った。

石川さんと嵩元編集長は事前に、石川さんが用意した日本酒で練習をした。嵩元編集長は「酔いが回らないよう、匂いで判別するようにした。石川さんが練習で用意してくれた酒と香りが似た酒が出て、当てることができた」と喜んだ。

石川さんは来春、ワインの専門商社に入社予定で「優勝できるとは思っておらず驚いた。日本酒と関わり続けた大学生活の答え合わせができたようで、うれしい。ジャンルは異なるが、同じ酒類に携わる者として、引き続き日本酒を味わっていきたい」と語った。

（結城希）

ねっしー・自然教育研究会

子供に科学の芽を育む

「子供たちを笑顔にしたい」。つくば市周辺の小中学生を集め、科学に関連したイベントを行う「ねっしー・自然教育研究会」の会員たちの思いだ。「ねっしー」はNature Education Clubの頭文字にちなむ。

今年の雙峰祭では「ねっしーの広場～宇宙旅行に出かけよう～」を出展し、雙峰祭グランプリ一般部門で特別賞（2位）を受賞した。

会場となった2B棟206教室には会員が手作りした分光器が設置され、太陽光をさまざまな色の光に分けたスペクトルが映し出された。

また、星座の形になるよう画用紙に穴をあけ、その上から色違いのセロハンを貼っていくステンドグラス作りや、ロボットアームを使ったミニゲームも行われ、2日間の来場者は延べ500人を超える大盛況だった。

雙峰祭の責任者を務めた藤岡紗代さん（障害1年）は「誰にも分かりやすいように、展示の説明にはイラストを多く取り入れた。また、来場者が自分の興味関心にあわせて楽しんでもらえるよう、幅広い企画を用意した。当日は子どもたちの嬉しそうな姿を見られて幸せだった。予想を上回る来場者があり、やりがいを感じた」と振り返る。

普段は筑波キャンパスや筑波大周辺の施設で3カ月に1回程度、イベントを開催している。

炎色反応の実験やペットボトルロケットの打ち上げ、化石の発掘体験、料理を通じて旬の野菜の知識を深めるなど内容は多様だ。今年は3月と8月に宿泊企画も開いた。

イベントで子供を案内する会員＝ねっしー・自然教育研究会提供

参加者の半数以上は小学校低学年だが、長年継続して参加している中学生もいるという。

会員は現在約60人。多くが教育に興味があり、子供と触れ合う機会を求めて入会する。学類1年生から大学院生までが所属するが、子供の前では上下関係を見せないのがモットーだ。イベントでは、ねっしーネームというニックネームで呼び合い、敬語は使わない。

イベントの草案は会員が持ち寄る。毎週月曜日と金曜日に行う会議で内容を議論し、テーマを決める。立案者が総合リーダーとなって企画内容の詳細を詰め、会場の予約やボランティア保険の加入など開催準備を進める。

10月までサークル長を務めた百瀬文太郎さん（情報2年）は「和気あいあいとした雰囲気が会の魅力だ」と話す。

子供の自立心を育てるため、イベントでは基本的に子供だけの参加に限っている。保護者からも「自分の時間が持てる」などの声が寄せられているという。子供に危険が及ばないようにするため、子供1～2人に対し会員1人がつくよう班を作り、会員の目が行き届くように配慮している。

雙峰祭の出展をきっかけに会の活動に興味を持つ子供も多い。コロナ禍で雙峰祭の開催が制限された昨年度までの3年間はイベントの参加者数も減少した。今年3月と8月に開催した二つのイベントの参加者数も約15人と落ち込んでいた。

だが、12月9日に筑波キャンパスで開いた天体観測と望遠鏡作りのイベントには40人の参加があった。

百瀬さんは「今年の雙峰祭の展示が契機になったと思う。宿泊イベントで、子供たちに『楽しいから帰りたくない』と言ってもらえた時は、最高にうれしかった。これからも子供たちが科学に興味を持つ一歩となるイベントを開いていきたい」と笑顔を見せた。

（吉川椛＝第2類1年）

元＆現筑波大生がフリマ開催

「人とのつながりを大切にしたい」

ビーズのアクセサリーを販売する出店者（11月19日、つくば市中央公園の水の広場で）

「つくばポットラックフリーマーケット」が11月19日につくば市中央公園の水の広場（つくば市吾妻）で開かれた。主催・運営は筑波大で同級生だった6人。子供から高齢者まで多くの住民がイベントを楽しんだ。

イベント名の「ポットラック」は参加者が好きなメニューを持ち寄って楽しむパーティーのこと。「人と人とのつながりを大事にしたい」と名付けた。

フリマでは手作りのアクセサリ、古本、古着、雑貨などを販売する12店が出店した。このうち「本と古着とおしゃべりと」では筑波大生が読み終わった本や古着、雑貨などを販売した。

運営メンバーもたき火などの企画を用意した。会場の中央にはこたつが設置され、会場を訪れた子供たちと絵本を読んだり、絵を描いたりして、まったりとすごした。

運営メンバーの島沙也加さん（教育P前期1年）は「同級生6人が昨年度に卒業年を迎え、進路が分かれた。仲間たちが集まり、学生時代にお世話になった方々と再会できる場になればと、企画した」ときっかけを語った。

同じく佐藤由さん（障害4年）は「悪天候で開催が1週間延期されたが、多くの方に来ていただけ、楽しかった」と喜んだ。（佟其志＝教育P前期1年、写真も。12面に関連写真）

Who's Who?

雙峰祭で妖怪仮装行列を企画

串田日向美（ひなみ）さん（比文2年）

百鬼夜行を成功させ、妖怪たちを従え笑顔を見せる串田さん＝本人提供

妖怪の魅力伝える 必要不可欠な「無駄」

妖怪の魅力を多くの人に知ってほしい――今年の雙峰祭では仲間たちを集めて「都市伝説軍団」を結成し、妖怪の仮装行列「百鬼夜行」を企画。筑波キャンパスを練り歩いた。自身のウェブサイトでは、笠間ひな吉のペンネームで、妖怪に関する研究や足を運んだ妖怪イベントなどを紹介している。

妖怪に興味をもったのは小学1年生の時。漫画家、水木しげるの代表作「ゲゲゲの鬼太郎」のアニメを見たことがきっかけだ。作品の内容はもとより、水木の描く妖怪画に強く引かれた。

「妖怪は実在せず、伝承で、曖昧な存在だ。その存在は無駄ともいえるが、そんな妖怪が人々の間に浸透して楽しまれているのが本当に面白い」。出会って以来、妖怪は人生で必要不可欠な「無駄」な存在だ。

中学、高校では自分の妖怪好きを隠して生活した。周りから変な目で見られるのが嫌だったからだ。しかし、好きな気持ちは変わらず、受験期も、妖怪について考えを巡らすことが息抜きになっていた。

大学に入学してから世界が広がった。転換点となったのは昨年10月。ツイッター（現X）の投稿で、妖怪のコスプレイベント「京都一条百鬼夜行」を知った。妖怪の格好をした人が街を歩く様子が映し出されており、漫画など二次元の存在だった妖怪が、三次元の存在になっていることに衝撃を受けた。

「自分もやってみたい」。筑波大の学生応援プロジェクト「T―ACT」に駆け込んだ。

今年6月、願いがかない、T―ACT公認企画として「百鬼夜行」が始動。自身のウェブサイトで全国各地の妖怪イベントを記録する活動も始めた。また、妖怪関連イベントに参加しては、参加者や運営者に話を聞いた。

10月には東京都江東区で開かれた妖怪イベントにブースを出展。オリジナルキーホルダーや缶バッジを販売し、SNS（ネット交流サービス）で活動するイラストレーターに依頼して描いてもらった都市伝説軍団がテーマのイラストのポストカードを配布した。「妖怪に少し興味を持つ人からマニアまで、さまざまな人が参加していた。妖怪というジャンルが広く楽しまれていることを実感した」という。

雙峰祭の「百鬼夜行」では、こうしたイベントで出会った人たちにも参加を依頼。当日は、快晴のキャンパスを4人の「妖怪」たちが歩き回り、来場者の視線を釘付けにした。

今後はつくば市の施設で妖怪の展示会を開くことが目標だ。

宿舎に星を見る少女が出没する、血塗られた建物がある、など筑波大にも都市伝説は多い。そうした「つくばの怪談」を紹介しつつ、SNSやイベントで知り合った妖怪画作家などの作品を展示し、「妖怪の魅力を広めたい」と話す。

「好き」から始めた活動で、妖怪の魅力を広めていく。

（久玉佳純＝比較文化学類3年）

編集後記

本紙編集室の書棚の上に高さ約40㌢の赤いだるまが鎮座しています。縁起物のだるまには、かなえたい願いが込められます。今まで気がついていませんでしたが、だるまの裏側を見ると、10年前の卒業生の名前と「1000号発行できますように」とありました▼今回は作品やイベントの裏側に迫った記事が多く掲載されています。ミニ特集（3面）では「大気」などのアート作品に込められた思いを探りました▼学生の思いが詰まった筑波大学学園祭（雙峰祭）は4年ぶりに通常開催されました（1面）。コロナ禍で引継ぎがままならず、多くの企画は準備に苦労しました。それでも、「開花」というテーマ通り、笑顔が満開の雙峰祭になりました▼「私も自分の思いを形に残したい」。同じ3年生の本紙、衣笠有紀記者とだるまの絵付けに挑戦しました。今回で執行代は引退です。今後も無事に発行できることを願った「発行だるま」と部員の健康を祈った「健康だるま」が完成しました。新執行代もきっと「七転び八起き」の精神で頑張ってくれるでしょう。応援をよろしくお願いします。（編集長・嵩元愛香＝心理学類3年）

次号は **2月13日（火）** 発行予定です

【編集・発行】
■筑波大学新聞編集委員会
▽委員長＝内海真生（生命環境系・教授＝水環境生態工学）▽副委員長＝中澤秋夫（学生部長）▽委員＝秋山肇（人文社会系・助教＝憲法・平和研究）、嵯峨寿（体育系・准教授＝レジャー・スポーツ産業論）、時井真紀（図書館情報メディア系・講師＝情報表現・物性理論）
◆
■筑波大学新聞編集部
▽編集代表＝鴨志田公男（筑波大学・教授＝サイエンスコミュニケーション）▽編集長＝嵩元愛香（心理学類3年）▽副編集長＝川上真生（社会学類2年）、加藤緑（生物学類2年）ほか編集部員17人
◆
発行所＝筑波大学
◆
印刷＝リフコム

学内総合

雙峰祭　斬桐舞

観客と一緒に踊る斬桐舞のメンバー（11月4日、石の広場で）＝嵩元愛香撮影

1面へ

学芸

MC展

多彩な作品をじっくり鑑賞する来場者たち（11月20日、つくば美術館で）＝金慧欣撮影

5面へ

スポーツ

TSUKUBA LIVE!

試合後、笑顔で握手を交わす選手ら（11月15日、つくばカピオで）＝久玉佳純撮影

8面へ

学生生活

元＆現筑波大生　フリマ

イベントの看板に自由に絵を描く参加者たち（11月19日、つくば市中央公園の水の広場で）＝佟其志撮影

11面へ